
新世紀エヴァンゲリオン ANOTHER story

穀羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン A N O T H E R s t o r y

【Nコード】

N 8 9 3 6 H

【作者名】

毅羅

【あらすじ】

第二作目となります。今回は本編にそった、しかしゲームの内容もいれた物になっております。ハッピーエンドにしたいかなと思っています。よろしくお願いします！！前作とは別物ですので。

第1話 使徒襲来（前書き）

再びよろしくお願いします!!!

第巻話 使徒襲来

「現在非常事態宣言がだされたため、すべてのライフラインがストップしています。くり返します・・・」

通信不可だと理解するとその受話器をおく。そしてここにくる前に渡された封筒から写真を出す。

「待ち合わせは無理か。仕方ない、シェルターにいこう」

少年、碇シンジは荷物を手に取ると誰もいない道路を歩き始めた。ふと、遠くのほうから聞こえる音に反応し、疑問に思った瞬間、目の前をものすごい勢いで巡航ミサイルが走っていった。

「なんだってんだよ!？」

シンジが向けた目線の先には巨大な生物が整然と歩いていた。

「なんだ、あれ？」

シンジがそれに見とれているうちに戦闘機が一機、その巨大な生物によって破壊され、シンジの眼下に落ちてくる。そして爆発した。

「・・・!!」

シンジがとつさに身を守るため両手を前にかざす。しかし、シンジを襲ったのは激しい風のみだった。

「ゴメーン!!。待たせた？」

シンジを爆発から守ったのは青いルノーの車だった。

「今は急いでるから早く乗って!!」

「は・・・はい!!」

シンジは戸惑いながらも車に乗り込んだ。

「しっかり掴まってね!!」

そして車は急バックから急発進してそこをものすごいスピードで駆け抜けた。

「ごめんごめん、巻き込んだじゃって」

運転している女性が話しかけた。

「いえ、危ないところをありがとうございます、葛城さん」

「ミサト、でいいわよ。よろしくね」

葛城ミサトと呼ばれる女性は横目でウィンクした。

「で、あれは何ですか？」

シンジはさっきみた巨人のことを聞く。

「状況の割に落ち着いてんのね。・・・、まあいいわ。あれは使徒と呼ばれる生命体。人類の敵よ」

「そうですか」

シンジとミサトはそのあとしばらく無言のまま移動した。そして車がモノレールにセットされたとき沈黙を破ったのはミサトだった。

「そうだ。お父さんからIDもらってる？」

「はい」

そういつてカバンをあけておもむろにIDを差し出す。それには本来の内容と来いとだけかかれた部分があり、それを一回びりびりに破きまた修正したあとがあった。

「はい」

確認するとミサトは冊子を渡した。

「・・・NERV？」

「そう、特務機関NERV。国連直属の非公開組織」

「・・・父の仕事ですね」

「まあね」

「・・・、父はどんな用があつて僕を呼んだんですか？」

「・・・」

ミサトは前を黙ったまま見つめる。

「そうですね。何も用がないのに父が僕を呼ぶはずありませんよね」

「苦手なのね、お父さんが」

「ただめんどくさいだけです。それに、会っても気まずいだけですから・・・」

「私とおなじか」

「えっ？」

すると目の前が明るくなり、眼下に地底湖やピラミッド型の建物が見えた。

「すごい!!。本物のジオフロントだ!!」

「ここは私達の秘密基地、NERV本部。人類再建の要よ」

「・・・」

その後シンジとミサトは中に入っていった。

「あっれ〜」

「ミサトさん、ここ通りましたよ?」

「き、気のせいよ。気のせい」

迷っていた。ミサトもここにきて日がたっておらずまだなれていなかったのだ。

エレベーターに乗っている最中、扉が開くと白衣を着た女性が入ってきた。

「あら、リツコ・・・」

ミサトは苦笑いをしている。

「なにをやっているの、葛城一尉。人手もなければ時間もないのよ？」

「ゴミン！」

「彼がサードチルドレンね」

「ええ」

「私は技術一課、E計画責任者、赤城リツコ。よろしくね」

「碇シンジです。・・・、よろしくお願いします」

リツコは二人を連れて移動した。

「ねえ、使徒はどうしたの？」

「やはり遠隔操作されたものではなく個体として孤立した、知的生物とMAGIは判断しているわ」

「じゃなくて、現状は？」

「依然侵攻中。N2地雷も表面組織を焼いただけで効果は無し」

「じゃあやはり・・・」

「エヴァしかないわね」

そしてボートに乗り換え暗い通路にでた。リツコが光を灯すとシンジの目の前には巨大な顔が現れた。

「巨大ロボット!？」

「人が生んだ、凡庸人型決戦兵器エヴァンゲリオン。その初号機」

「・・・これも父の仕事ですか」

「ああ、そうだ」

ふと見上げると上のガラス越しから父、碇ゲンドウの姿がみえた。

「久し振りだな。シンジ」

「・・・」

「出撃」

ゲンドウが呟いた。

「何ですって!？」

同タイミングでリツコもミサトに言っていた。

「今はすぐにも使徒と戦うことが最優先です」

「でもパイロットは・・・、ってまさか彼を!？」

「シンジ君。乗りなさい」

リツコはシンジに近寄り言い放つ。シンジは正面を向いたまま言う。

「どうせこんなことだろうと思ってました」

そう言ってシンジはゲンドウを見る。

「父さん、一つだけ聞かせて」

「なんだ」

「さっきリツコさんは僕のことをサードチルドレンと言った。つまり、僕のほかにファーストやセカンドチルドレンがいるっていうことだね。その子たちは？」

リツコは驚いたような顔をしてシンジを見る。

「いいだろう。ファーストチルドレンは先にあった事故で負傷、病院で治療中だ。セカンドチルドレンはまだドイツで訓練の最中だ」

「それで僕しかないってことで呼んだわけだね？」

「そうだ」

シンジは深呼吸をして言った。

「そう。分かったよ。乗るよ」

そう言ってリツコをみた。

「すぐに準備を」

そう言ってリツコに指示を求めてリツコにつれられた。

そして数時間後・・・

シンジはエントリープラグ内にいた。

「冷却完了。ケイジ内、すべてドッキング位置」

「パイロット、エントリープラグ内コクピット位置に着きました」

「プラグ固定終了。エントリープラグ注水」

するとエントリープラグ内がLCLに満たされる。

「なんだこれ？」

「心配しないで。直接肺に満たされれば酸素を運んでくれます」

「主電源接続。前回路動力伝達。起動スタート」

「A10神経接続異常なし。初期コンタクトすべて問題なし」

「すごい。シンクロ率、41.3%。いけるわ」

リツコが思わず驚嘆の声を漏らす。

「エヴァンゲリオン初号機、発進準備!!」

「第一ロックボルト解除」

「続いてアンビリカルブリッジ移動」

「第一第二拘束具除去」

「一番から十五番までの安全装置解除」

「内部電源充電完了。外部電源コンセント異常なし」

「エヴァ初号機、射出口へ」

シンジはこれまでの行動を緊張の中見つめる。

「五番ゲートスタンバイ」

「進路クリア、オールグリーン!!」

すべての準備が整い、ミサトはゲンドウをみる。

「碇指令。かまいませんね？」

「ああ。使徒を倒さぬ限り、我々に未来はない」

「発進!!」

その瞬間、初号機はものすごいスピードで地上にでた。目の前には使徒がすでにいた。

「最終安全装置、解除。初号機、リフトオフ!!」

そして初号機は地にたった。

「がんばって、シンジ君」

シンジは不安と緊張を持って操縦桿を握りしめていた。

「・・・やってやる!!」

そう思って使徒を睨みつけたのだった。

第貳話 戦いの最中（前書き）

感想よろしくお願いします！！

第貳話 戦いの最中

目の前に立ちはだかる使徒をシンジは見つめていた。

「サキエルと呼称します。頑張ってね」

「はい」

すると突然初号機がジャンプした。

「えっ!？」

ミサトをはじめ、NERV職員は驚いている。初めて乗った機体でここまで出来るとは普通はあり得ないことなのだ。

そして初号機はサキエルにけりを加える。さらに距離をつめ、腹部にパンチした。

吹き飛ぶサキエル。

「そんな、有り得ない……。今のシンクロ率が71.4%なんて」

リツコは驚きを隠せない。なにせ出撃前は40%台だったのがいきなり30%も上がっているのだから。

初号機は追い打ちをかけるように連打をかます。

「これで!!」

初号機が左腕を振ったときそれはサキエルに掴まれた。

「……!？」

そして顔を掴まれて引っ張られた。

「・・・っ!？」

エヴァと高い率でシンクロする事はパイロットの体にフィードバックするダメージもより現実になくなるということである。
そして左腕が折れた。

「左腕断列!!」

「まずいわね。パイロット側のシンクロ度数、一桁下げて!!」

「はい!!」

サキエルはそのまま顔を掴んでいる左腕から光の槍を出すと初号機の右目付近を攻撃する。当然、シンジにもその痛みは影響する。

「頭部に亀裂発生!!。装甲がもう保ちません!!」

そして光の槍は初号機の右目を貫きそのまま後ろにあるビルに叩きつけた。シンジはもう意識はない。

「頭部損傷!!。パルスが逆流しています!」

「回路遮断!!。せき止めて!」

「信号受け付けません!」

リツコは顔をしかめる。ミサトは焦った顔をしている。

「くっ・・・、ここまでね。パイロット保護を最優先、プラグを強制射出して!!」

「信号拒絶!!。ダメです、完全に制御不能です!!」

「何ですって!?!」

その時、初号機が動き出した。

「グオオオ!!!!」

初号機が吠える。

「エヴァ、再起動!」

「そんな。シンクロ率はマイナスなのに・・・。まさか!?!」

「暴走!?!」

初号機はもう一度吠えるとジャンプしてサキエルにけりを加えまた距離をとる。サキエルは突然のことに対応できずにいた。初号機が目の前から突進するのを確認するとサキエルはA・Tフィールドを展開した。それにもろに初号機はつつこんでしまう。

「A・Tフィールド!?!。あれがある限り使徒には接触できない!!」

初号機は体勢を立て直すと左手をかざし、おれている部分を復元した。

「左腕復元!!」

そしてそのまま両手でA・Tフィールドを裂くような動作をする。

「初号機、A・Tフィールド展開。位相空間を中和していきます」

そして初号機は使徒のA・Tフィールドを裂いて接近する。

・・・ピカッ!!

使徒の目が一瞬ひかり、ビームを出す。しかしそれは初号機のA・Tフィールドに阻まれた。そのまま初号機のタックルをくらい倒れ込む。そして初号機はコアを殴り始めた。だかサキエルは急に初号機に取り付き、コアを光らせ始めた。

「自爆する気!?!」

ミサトは焦る。そしてサキエルは爆発した。

「目標、消滅を確認。初号機、健在です」

初号機は爆園の立ち上る中歩みを進めていた。ミサトをはじめNE RV職員はエヴァに対して一種の戦慄を感じていた。ただ一人、ゲンドウを除いて。

使徒殲滅から一日後、シンジは病院で目を覚ました。

「・・・知らない天井だ」

シンジは病室からだと一人の女の子がいた。

「君は誰？」

シンジは歩み寄って聞く。その子は青い髪の毛をしていて眼が赤く、肌が真っ白だった。

「・・・」

「僕は碇シンジって言うんだ。君は？」

「綾波レイ。ファーストチルドレンであなたと同じエヴァのパイロットよ」

「君が？。驚きだな。ぜんぜんそんな風には見えない」

「そう・・・」

それからレイは黙ってしまった。

「あの・・・さ」

「なに？」

「これからよろしくね」

「ええ」

するとレイはシンジと逆の方向へ向く。目線の先にはゲンドウがいた。

「それじゃ」

レイは走って行ってゲンドウの背中を追いかけた。

「父さんにとって綾波はどんなんだろう・・・」

シンジはそれを口にせずにはいらなかった。

「傷心の息子にも声をかけないなんて冷たいわねえ」

「ミサトさん!？」

突如出現したミサトにシンジは驚いた。

「なあにお化けみたような顔して!」

「どうしたんですか？」

「あっ、そうそう。シンジ君はどこですむのかなと思ってね。お父さんと一緒に住むの?」

するとシンジはうつむいて言った。

「NERVの部屋を借ります。父さんといっても気まずいだけだしひとりのほうが楽ですから・・・」

それを言うシンジの姿をみてミサトは考えて突然携帯を取り出した。

「もしもし、リツコ?。あのねシンジ君のことだけどあたしが引き

取ることにしたから。上の許可は取ってあるし大丈夫よん。じゃね」

そう言ってミサトは携帯をしまおうとシンジに笑いかけた。

「という事だから、よろしくねん！」

そしてシンジはミサトに連れられ車に乗せられコンビニで買い物につきあわされた。

「さあて、今日はパアツとやんないとね!!」

シンジは依然黙ったままだ。

「・・・」

少したってミサトが口を開く。

「あつ、チョツチよるところあるから」

そして周りが一望できる休憩所でミサトは車を止めてシンジと一緒に外にでた。

「寂しい町ですね・・・」

だがミサトは気にせず時計をみる。

「時間だわ」

すると警報がなり、ジオフロントの天井都市が現れた。

「すごい。ビルが生えてくる！」

警報が鳴り終わると数分前にあった殺風景な町ではなくとても大きな町になった。

「第参新東京市。別名、使徒迎撃要塞都市。あなたの守った町よ」

その言葉にシンジは首を振って反論した。

「そんな立派なもんじゃないです。エヴァに乗った理由はこの町を守る為じゃないし綾波を守る為でもない」

「分かってるわ。でもあなたは立派によくやった。自信を持ちなさい」

シンジはその言葉を聞き泣き出してしまった。

「あれれ、なんか悪いこと言った？」

「ミサトさん、僕は・・・、僕は・・・、その言葉を、あのとき聞きたかったです・・・」

ミサトはそれを悟るとシンジを優しい目で見た。

シンジは子供のように泣きじゃくっていた。

第参話 ナイフと少年（前書き）

感想よろしくお願いします！

第参話 ナイフと少年

「チョツチ汚れてるけど気にしないでね」

シンジはミサトの家にきていた。というのも連れられてきたという方が正しいのだが・・・。

シンジは家の中に入ったとたん絶句してしまった。無造作においてある洗濯物、散乱するゴミがあちらこちらにあったのだ。

「ミサトさん、いつからこの状態ですか？」

「えっ・・・、えーと、今まで・・・」

「掃除します!!」

そう言ってシンジはどこからともなく掃除用具一式を持ってくると掃除を始めた。

そして数時間後・・・

「ふう・・・」

前より見違えるようにきれいになった部屋をみてシンジはほっとする。

「ミサトさん」

「はいっ!」

「ご飯は全部僕が作ります。ミサトさんとオールレトルトになり

そうだし」

「はぁ・・・」

もうミサトは頭を下げるしかなかった。
その後当番表も完成し夕飯を食べた。

「あつ、そうだ。シンちゃん。先お風呂はいっちゃいなさい」

「でも・・・」

「今日はあなたががんばった日なんだから遠慮しない！。お風呂は命の洗濯よ」

そうしてシンジはお風呂に入り、自分の部屋に戻ってベッドにウオークマンをつけたまま寝転がった。

「なんか、今日はいろいろあり過ぎたな・・・。まだ混乱してる」

シンジの頭の中には病院に入る前の記憶がフラッシュバックされる。

「でも、みんな期待してくれてる。頑張らなきゃ」

そう思ってシンジは眠りについた。

翌日・・・

シンジは学校に登校した。自分のクラスに入るとシンジの目にレイが飛び込む。

「彼女も同じクラスだったのか」

そうして昼休みを迎える。すると一人の少年がシンジを屋上に呼び出した。彼の名は鈴原トウジ。

「お前、エヴァのパイロットやなんてな」

「うん」

「前のドンパチでうちの妹がどなくなったかわかるか？」

「・・・怪我、しちゃったの？」

「がれきの下敷きになってもうてな」

シンジはそれを聞いてうつむく。

「ごめん・・・」

「ごめんですんだら警察もいらんわ!!」

「ごめんって言って君の妹が治るわけじゃないのは分かってる。でも・・・、ごめん」

するとトウジはいきなりシンジを殴った。

「お前の言葉は他人ごとに聞こえんのや!!。なめとんのか!!」

「ごめん。でも今は周りに気を使うほど余裕ないんだ」

すると突然レイがシンジの元に駆け寄ってくる。

「非常召集、先行くから」

するとレイははしっていった。

「待ってよ、綾波！」

シンジも綾波を追いかけていった。

一方NERVでは・・・

「第伍の使徒襲来か。はいわね」

「前は15年のブランク。今回はたったの三週間ですからね」

「こっちの都合はお構い無しか。女性に嫌われるタイプね」

イカのような形状をした使徒は第参新東京市に直進してくる。

「迎撃システム、起動！」

すると使徒にむけて弾幕が張られるが全く効果はない。

「税金の無駄遣いね」

リツコがつぶやく。

「世の中使ってもらってほしい人もいるのよ」

「委員会からエヴァの出動要請が来ました」

「うるさい奴らね。言われなくても出撃するわよ」

シンジはエントリープラグ内で発進準備をしていた。

「シンジ君、準備はいいわね？」

「はい」

「エヴァンゲリオン、発進！！」

ミサトの号令とともに初号機が射出される。地上にでると使徒の死角にはいりこみガトリング砲を装備する。

「目標はシャムシエルと呼称します」

シンジは呼吸を整えると一気に前にでてガトリング砲を放った。すぐに使徒は爆煙で見えなくなった。

「バカ！。敵が見えないじゃない！！」

すると初号機はジャンプをした。そのタイミングで使徒の触手のようなものがさっきまでいた初号機の空間をなぐ。しかしそれはむなしく空を切るだけだった。初号機はそのままシャムシエルにけりを加えると接近して銃口をあてがえ、一気に放った。もろに食らうシャムシエル。が、食らいながらも触手を初号機にむけて放った。

「・・・！？」

突然の行為にシンジは反応できず、すんでのところで回避したがガトリング砲は破壊された。さらにたたき込むように攻撃し、アンビリカルケーブルが切れた。

「アンビリカルケーブル切断!!。内部電源に切り替わりました。
残り時間五分!!」

「まずい!!」

初号機は体勢を立て直そうと立ち上がるが足をすくわれ遠くに投げられた。山に激突し衝撃がシンジにも伝わる。

「大丈夫!？」

「まだいけます!!」

すでに初号機の内部電源は残り二分をきっていた。初号機はプログレッシブナイフを装備する。

「シンジ君、一時退却よ!!」

「やだ」

「シンジ君!？」

すると初号機は山の斜面を下り始めた。それをみてシャムシエルは触手で攻撃するがそれをよんでいたかのようにジャンプしてかわし、けりを加えた。

「ウオオ!!」

そのまま肉弾戦に持ち込む初号機。

「なに考えてるの、シンジ君・・・」

そしてあと一歩のところで胸部を貫かれる。

「くっ・・・!!」

「初号機、活動限界まであと一分!!」

「シンジ君!!」

「うわあああ!!」

初号機は貫かれたまま無理に機体を押し込みプログレッシブナイフでコアを突き立てる。

「うおお!!」

「初号機、活動限界まであと十秒!!」

するとシャムシエルのコアの色が変わって動かなくなった。同時に初号機も活動を停止する。

「初号機、活動限界です。目標、沈黙を確認」

シンジは命令違反をしながらもシャムシエルを倒した。

第肆話 レゾンデートル（前書き）

感想よろしく！

第肆話 レゾンデートル

「なんで命令を無視したの？」

「・・・」

「あなたは私が作戦部長なんだから私の命令に従う義務があるの。分かる？」

「はい」

シンジはシャムシエル戦の時の命令無視についてミサトから怒られていた。

「ミサトさん」

「なにか？」

「人に殴られてまでエヴァに乗らなきゃいけない理由って何ですかね？」

そう言ってシンジはロッカールームを出てしまった。

「シンジ君、大丈夫かしら・・・」

その予想は見事当たってしまう。

翌日・・・

「シンジ君が家出した!？」

「そうなの。まさかとは思ったけど本当に・・・」

「仕方ないわね。諜報部に連絡するわ」

「ちょっと・・・、それは」

「それとも？。彼が行きそうな場所分かるの？」

「まさか・・・。あの子の行くような場所、分からないわ」

その頃シンジは電車とバスを乗り継ぎ郊外にきていた。そしてシンジは第参新東京市が一望できるところで寝転がる。

「何で僕がエヴァに乗らなきゃいけないんだろう・・・」

シンジは考えていた。考える時間がほしかった。別にミサトや父さんから逃げるつもりではなかった。

「僕の存在理由は・・・」

そうして夜・・・

シンジは帰ろうかとして立ち上がったときいきなり光に包まれる。

「碇シンジ君だね」

「はい。僕をミサトさんのところへ連れて行ってください」

そうしてシンジはNERVへ連れて行かれた。その後、収容された部屋にミサトが来た。

「どう？。一日ほつつき歩いて気が晴れたかしら」

「僕はただ僕がここにいていい、いなくちゃいけない理由を探してました」

「理由？」

「そうです」

「それで、理由は見つかったの？」

「はい」

するとミサトは安心したような顔をした。

「今日は家に帰って休みなさい」

「はい」

そうしてシンジは戻ってきたのである。

そして翌日・・・

今日はレイの零号機再起動実験の日である。シンジはミサトに頼まれて新しいIDカードを渡すためレイのマンションにきていた。

「綾波、新しいIDカード持ってきたよ」

「そこにおいという」

レイはそっぽを向いて言う。

「それと僕も本部に行くから一緒に行こうよ」

「別にかまわないわ」

そうしてシンジとレイは一緒に行った。しかし無言のままNERVまで行ってしまった。

エスカレーターの所でシンジが口を開く。

「綾波は父さんのこと信頼してる？」

シンジが一番聞きたかったことだった。

「碇君は信頼してないの？」

「当たり前だよ！！。あんな父親・・・」

「私は信頼してるわ。私が信頼してるのは、この世で碇指令だけ」

そしてレイは先に行ってしまった。シンジはレイがなぜそんなに想えるのか分からなかった。

そして零号機の再起動実験は成功する。その時・・・

「未確認飛行物体・・・、いえ、パターン青！！。使徒が接近中です！！」

使徒が現れたのだ。その姿は正八面体をした青色の生物を思わせない形をしている。

「零号機ではまだ実戦には対応できない。初号機を発進させろ」

ゲンドウはすぐに指示をとばす。シンジはそれに従って初号機に乗り込む。

「僕には頑張れの一言もないんだね、父さん・・・」

シンジはこんな事を思っていた。

「シンジ君。地上にでたと同時にA・Tフィールドを展開、すぐに遠距離武器をとって攻撃して!!」

「はい」

そして初号機が射出された。と、同時に使徒が正八面体から真ん中から二つに分離し、細長い直方体の板のような物を上下に展開し、中心部に赤いコアを出す。

「目標の中心部に高エネルギー反応!!。収縮していきます!!」

「まさか、陽電子砲!?!。シンジ君よけて!!」

そして初号機が地上にでたと同時に発射され、真っ直ぐに初号機に向かう。それに気づかなかった初号機はもろに胸部に食らった。展開していたA・Tフィールドも全く意味をなさなかった。

「うわああっ!!」

突然食らった攻撃にシンジは叫び声を上げる。

「防衛施設起動!。シールド展開して!!」

すると初号機の目の前にシールドがせり上がってきて陽電子砲を防いだ。すると使徒は攻撃を中断。今度は上下左右にロッドのようなものを展開してその上部にコアを四つ展開。それぞれから放たれた陽電子を中心に収縮して放った。これはシールドも意味をなさずに融解して初号機を攻撃した。

「やだ、もういやだ！！！！。助けて、ミサトさん、父さん！！」

シンジが凄まじい激痛に耐えきれずに叫ぶ。

「初号機、戻して！！」

「ダメです、すでに融解しています！！」

「くっ……。仕方ないわね。爆碎ボルト起動！！。初号機を強制回収！」

初号機のいるエリアの爆碎ボルトが起動し、地面ごと初号機を強制回収した。目標がいなくなったことを確認すると使徒は砲撃を中断、NERV本部直上までいくと下部を伸ばして穴を掘り始めた。

「パイロットを緊急治療、急いで！」

シンジは素早く医療カプセルの中に入れられると治療を開始した。そこで取りあえずの休息を得る。そして実験を行って少しずつ使徒の実体が見えてきた。

「これまで採取したデータによりますと目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推測されます」

「エリア侵入と同時に加粒子砲で完全に狙い撃ち。A・Tフィールド中和可能なエヴァによる近接攻撃は無理というわけね……。敵のA・Tフィールドは？」

「健在です。相転移空間を肉眼で確認できるほど強力なものが展開されています」

「まさにパーペキな空中要塞ってわけね」

ミサトは考え込む。

「問題のボーリングマシンは？」

「第二装甲板まで到達しています。明日0時6分54秒には全22層の装甲防壁を貫通して本部へ到達すると思われます」

「初号機と零号機の状況は？」

ミサトはリツコに通信回線を使って状況を聞く。

「胸部第三装甲までみごと融解。機能中枢をやられなかったのは不幸中の幸いね。三時間後には換装終了よ。零号機は再起動に問題はなし。ただフィードバックにまだ問題が残るの」

「零号機はまだ実践は無理か。シンジ君もまだ眠ってるし、状況は芳しくないわねえ」

ミサトは頭を抱えてため息をつく。

「白旗でもあげますか？」

「ナイスアイデア！。でもその前にやってみたいことがあるの。
あの世で後悔したくないようにね」

シンジはその頃目が覚めていた。

「またここか・・・」

「目が覚めたのね」

「わっ！！」

シンジのベッドの横にはレイが小説を座って読んでいた。レイはシンジが起きたのを確認すると食事とメモ帳をおいた。

「これは？」

シンジがメモ帳を指差して聞く。

「これからのスケジュール」

レイが答える。

「わかったよ」

シンジはメモ帳に一通り目を通すとレイに返す。

「時間通りに行くから大丈夫だよ」

「わかったわ。じゃ、また」

するとレイは出て行った。

「目標のレンジ外、超長距離からのエヴァによる射撃かね」

「はい。これがA・Tフィールドを中和せずに確実に目標を殲滅できる方法です。MAGIによる成功予想も一番高い数値を記録しています」

ミサトはゲンドウと冬月にヤシマ作戦とかかれた書物を見せながら話している。

「反対する理由はない。やりたまえ、葛城三佐」

そうしてヤシマ作戦の準備が始まった。

シンジはこれから始まる過酷な現実にまだ気付かずにいる・・・。

第五話 夜空に浮かぶ月のように（前書き）

感想よろしく!!

第伍話 夜空に浮かぶ月のように

着々とヤシマ作戦の準備は進んでいた。

「ポジトロン・ライフルの状況は？」

「技術部の意地にかけても後三時間で形にして見せますよ！！」

「しかし頭の固い戦自がよく応じてくれたわね」

リツコがミサトに言う。

「奴らには私達に貸りがあるからね」

ミサトは外にでて遠くに見える使徒を見ながら言う。

「後は子どもたち次第ね」

「やってくれるわよ。きっと」

ミサトはそう思っていた。

シンジはレイと一緒にエヴァの戦闘配置場所、双子山に来ていた。
夕日が沈んで月があがってくる。

「エヴァ初号機のB型装備、換装完了しました」

「了解。二人ともこっちきて」

シンジとレイはミサトに呼ばれて駆け寄る。リツコもいた。

「じゃあこれから説明するわね」

そしてミサトが説明を始めた。

「まず、攻撃方法はこのポジトロン・スナイパー・ライフルを使うわ。これならA・Tフィールドを中和せずに攻撃できる。精密機械だから野戦向きじゃないのが難点だけだね。防御はこのシールドを使うわ。敵の砲撃にも17秒耐えられるわ。砲手はシンジ君、防御はレイが担当して」

「はい」

シンジとレイが返事をする。

「これはより高いオペレートが必要だから。分かるわね？」

「シンジ君。陽電子は地球の自転、磁場、重力の影響を受け直進しません。その誤差は機械がやってくれるからあなたはテキストどおりやって」

「分かりました。もし一発目が外れたら？」

「今はよけいなことを考えないで一撃で撃破することだけを考えなさい」

「てことは二発目は考えるなってことか・・・」

シンジはそう思った。

「すでに日本中のエネルギーケーブルはつながってるからあとは作戦時間までゆっくりしててね」

全て話し終わったあとミサトはシンジをつれてまたジオフロントに行った。

「いったいどうしたんですか。時間もあまりないのに」

「あなたに見せておきたいものがあるの」

そうしてエレベーターに乗ること数分、階数を示すメーターがレベルE E Eと示すようになった。エレベーターから降りると真っ直ぐ直進する。時々見える通路標識にはセントラルドグマと書かれていた。そして大きな扉の前に立ち止まる。ミサトはIDカードを読み込ませて扉を開ける。そこには巨大な十字架に張り付けにされている使徒がいた。シンジは驚く。

「ミサトさん。これはいったい・・・」

「第式使徒、リリス。ヒトの始祖たる存在。これと使徒が接触するとサードインパクトが起きるの。人類は滅亡するわ。私達はそれを阻止するために存在するの」

「僕の両肩には全人類の命が乗っかってるんですね」

「つらいと思うわ。あなた達にやらせて申し訳ないと思ってる。でもシンジ君。思いはみんな同じよ」

「分かってます。僕にしかできないのなら全力でやりますよ」

するとシンジはミサトの手を握る。

「頑張ってね」

ミサトは手を握りかえた。

その後シンジは再び双子山に戻ってレイと一緒に作戦開始時間まで待つことにした。時間が近づくにつれて明かりが消えてゆく。

「綾波はなぜこれに乗るの？。危ない目に遭ってるのに」

シンジはいつの間にか話しかけていた。

「絆・・・だから」

「父さんとの？」

「みんなとの。私にはこれしかないもの。私はエヴァに乗るために生まれてきたようなもの。エヴァに乗れなければそれは死んでいるのと同じだわ」

レイはそう話した。

「死んでいるのと同じ。じゃあ、僕がここにくる前はそうだったのかな」

レイはシンジを見る。シンジは過去の自分を思いだしていた。

「何もかも嫌で、無気力で、どうしてもよくて、そのくせ表面上は素直でいい子を装ってしまう。僕は今まで生きているふりをしていただけだったのかもしれない」

ふと、どうしてレイにこんなことをはなしているのかとシンジは思った。

きつと綾波は僕よりもつとないにもない。分からないけどそんな気がする。

シンジはそう思った。

「時間だわ」

綾波は立ってエヴァに向かう。

「碇君。あなたは死なないわ。私が守るもの。・・・さようなら」

シンジは急に言われてポカンとしてしまった。少し遅れてエヴァに乗り込む。

そして初号機はポジトロン・スナイパー・ライフルを構えた。

「作戦開始と同時に第参新東京市の全てのミサイル、砲塔で目標が初号機を悟らないように威嚇。その際にエネルギーをためておいていいわね？」

ミサトは指令を出す。そして時計が作戦開始時間を示した。

「時間です」

「シンジ君。日本中のエネルギー、あなたに預けるわ」

「はい」

「ヤシマ作戦、スタート!!」

すると大量のミサイルが使徒に向かって飛んでいく。使徒はそれを確認すると周りに細長い小さな正八面体を展開するとそれを回転させミサイルをなぐように掃射した。そしてそのミサイルが撃たれたところを狙い撃って蒸発させる。

「悟られるわよ。つぎ!!」

それと連動して電力が充電される。

「電圧上昇加圧域へ。全冷却システム出力最大へ。陽電子流入順調!!」

「第二次接続!!。全加速機運転開始。強制収束機作動」

「全電力双子山増設変電所へ。第三次接続問題なし」

「最終安全装置解除!!」

「撃鉄おこせ!」

シンジは反応して撃鉄を起こす。シンジの頭を覆うように精密射撃専用モニターが現れる。そこにはミサイルや砲撃にたいして目まぐるしく体を変化させて対応する使徒が見えた。

「全人類の命を守る……。そんな実感のないことを僕なんかがやっていいのだろうか」

シンジはそう思いながらも操縦桿を握りしめる。そして標準が使徒のコアにあった。

「そこだ！」

初号機は引き金をひく。

真っ直ぐ陽電子が使徒のコアを指すがすんでのところで使徒が気づき、加粒子砲を放ち、進路変更され、コアをかするに至った。

使徒がウニのような形をして叫び声をあげる。コアからは血が吹き出しているが致命傷には至らなかった。すぐさま使徒は形状を変えて初号機を狙う。が、先ほどのダメージが残っていたのかそれは初号機後方に当たった。しかし凄まじい勢いだったため初号機やミサトたちが乗っている車が吹き飛ばされる。

「くっ……。シンジ君は!？」

ミサトが初号機と通信をとろうとしたがシンジのおびえた声しか聞こえなかった。

「シンジ君……」

その様子は本部にいたゲンドウたちにもモニターされていた。ゲンドウはミサトと通信をとる。

「現時刻をもって砲手を零号機に変更。おびえているパイロットは役に立たん」

しかしそれにミサトは反論した。

「待ってください!!。今、初号機パイロットは使徒の脅威と過去の自分と自分の意志と戦っています。まだ切り捨てないでください。自分の息子を信じてください!。私は初号機パイロットを信じます

「!!」

ゲンドウはそれを聞き黙り込む。そして・・・

「好きにしまえ」

「ありがとうございます」

ミサトはそういつて通信をきった。

シンジは初号機を再び射撃ポイントにおくと構えた。

「シンジ君。私たちの願い、人類の未来、生き残ったすべての生物の命、あなたに預けるわ。頑張ってね、シンジ君」

「はい」

シンジは決意を持った瞳で前を向く。

「ヒューズ交換!」

その言葉通りにトリガーをひいて交換する。

「砲身冷却開始!。再充電開始!!」

「B型装備が強制解除されたため標準はパイロットの手動で合わせるタイプに切り替わりました」

「冷却、再充電ともに終了!!」

「ボーリングマシン、全層を貫きました!」

その瞬間、使徒が初号機にむけて加粒子砲を放つ。今度は初号機に真っ直ぐ向かった。

「うわあっ!!」

しかしそれは初号機に向かうことはなかった。初号機の目の前には零号機が盾を使って防いでいた。その盾もどんどん壊れていく。

「盾がもうもたないわ!!」

「はやく、はやく!!」

シンジは標準をあわせていた。そして標準が使徒のコアと重なる。

「そこっ!!」

初号機は引き金をひく。今度は真っ直ぐコアを貫いた。使徒はウニのような形をしてからゆっくりと崩れていった。

その後シンジは零号機からエントリープラグをぬいて加熱したハッチを素手で回して開けた。

「綾波、大丈夫か、綾波!!」

シンジの呼びかけで目を覚ますレイ。

「碇・・・司令?」

ばやけていた視界が回復すると心配そうにのぞき込むシンジがみえた。

「碇君・・・」

「よかった。生きてた・・・」

「・・・」

レイは黙ったままシンジをみた。

「自分には他には何もないなんてそんなこと言うなよ。・・・別れ際にさよならなんて悲しいこと言うなよ」

シンジは泣いていた。レイは不思議そうにのぞきこむ。

「なに、泣いてるの」

「バカ。綾波が生きててうれしくて泣いてるんじゃないか」

「うれしくて？。嬉しくても涙がでるのね」

レイは再びシンジをみる。

「ごめんなさい。こんなときどういう顔をしたらいいかかわからないの」

「笑えばいいと思うよ」

レイは驚いてシンジをみる。そして・・・優しく微笑んだ。シンジはレイの手を取ってエントリープラグから出た。

「綾波、僕たちは今エヴァに乗るしかないと思うけどいつか生きてよかったと思えるときがくるよ。いつか先のこともしれないけど二人で行けばきっと思えるよ」

夜空に浮かぶ月は二人のこれからの道を照らすかのように存在していた。

第陸話 アスカ、来日（前書き）

これからオリジナルをちよくちよく入れたいとおもいます！！

第陸話 アスカ、来日

ヤシマ作戦が終了してから1ヶ月・・・

シンジの周り・・・、と言うよりレイに変化が起きていた。

「碇君、今日先に行くから」

「あ、うん」

シンジはレイに手を振る。レイも手を振りかえしていた。

そう、レイの行動が人間らしくというか、積極的になったのである。最初、これにはシンジは驚いたがこれがふつうなんだとシンジは思っていた。

学校が終わり、NERVに着くと何やら忙しそうにみんなが動いていた。

「どうしたんですか、ミサトさん」

シンジは仕事を一段落つけたのか休憩しているミサトに話しかけた。

「あつ、シンジ君。今日はね、ドイツからセカンドチルドレンとエヴァ式号機がNERVに来る日だったのよ」

「セカンドチルドレンが来たんですか！？。どんな子ですか？」

「あらゝ、シンちゃん。興味あるの？」

「違いますよ。これから命を預け合う仲になるわけですから知りた
いじゃないですか」

「まあ、そうね。とっても聡明な子よ。大学でてるし。ただ性格がね……」

「誰が性格がダメですって!？」

すると物陰から朱色とオレンジを混ぜたような髪の色をしたロングヘアーの青色の目をした女の子が出てきた。

「あらら、いたの。シンジ君。彼女が……」

するとその女の子がシンジの前に出てきた。

「自己紹介ぐらい自分でするわよ。セカンドチルドレン、弐号機専属パイロットの惣流・アスカ・ラングレーよ。よろしく」

「よ、よろしく。惣流さん。僕は碇シンジ。サードチルドレンで……」

「ミサトから聞いてるわ。それより惣流さんて止めて」

「じゃあなんて呼べばいいんだよ」

「アスカでいいわ。私はあんたのことバカシンジってよぶから」

なんとシンジに呼び方を指定され勝手にあだなまで決められてしまった。

「まあ、いいけどさ」

シンジはそういうと部屋を出ようとする。

「ちょっとどこ行くのよ?」

アスカはシンジを止める。

「どこって初号機のところ。自分でできることはしないとね」

するとアスカはシンジの手をつかんだ。

「私の式号機見てきなさいよ!」

アスカはそういつて聞かない。シンジはどうしようかと思っているときに警報が鳴った。

「何事!？」

シンジとアスカ、ミサトが第一発令所にいくと使徒がモニターされていた。

「現在、目標は空中から一定の距離を保っています」

使徒は空を浮遊していて第参新東京市を見下ろしていた。その姿は盾と剣をもったヒト型をしていた。

「まるで天使といったところかしら」

「目標の動きはありません。どうしますか?」

「私が行くわ」

アスカが胸元にてをあて自分を誇示するように前にでた。

「日本のデビュー戦、美しく飾りたいじゃない」

するとアスカは第一発令所を出て行った。

「仕方ないわね。式号機出撃準備!!」

式号機が出撃準備する。

「相手は空中にいるわ。S型装備、初めてだけど使わせてもらおうわよ」

「望むところよ!」

S型装備とはエヴァの背面にバーニアと制御翼をつけた対空中専用装備である。

「初号機と零号機はバックアップ!!」

ミサトはそう告げるがアスカは反論する。

「私一人で十分!!。バックアップなんていらないわ!」

「でも・・・」

「でももししゃもないわ!!」

「ししゃもって・・・分かったわ。ただ待機はさせておくわよ」

「おあいにく様。心配ご無用よ!!」

そして式号機が発進した。

「式号機、リフトオフ!」

そして式号機はソニックブレイヴを装備する。ソニックブレイヴとは槍型の近接戦闘用武器である。

式号機は使徒の姿を認めるとバーニアを噴かして飛んだ。

「てええい!!」

式号機はソニックブレイヴを振りかざして使徒に攻撃する。だがそれは、A・Tフィールドによって防がれた。

「ちっ!!」

式号機は後退して距離をとる。と同時に使徒は接近して盾を式号機に叩きつけた。

「くっ・・・」

式号機は体制を整える。使徒はそこに追い打ちをかけるように体当たりした。

「くっ・・・そお!!」

式号機は吹っ飛ばされながらも無理やりバーニアを噴かして勢いを殺し、ソニックブレイヴで攻撃した。使徒も剣でそれをはじく。そ

それぞれの武器で打ち合う式号機と使徒。そのなか先手を打ったのは使徒だった。盾でソニックブレイヴを跳ね上げて式号機の胸部を剣で突き刺したのである。

「キャアア!!」

激痛に耐えかね叫ぶアスカ。

「こんのおお!!」

式号機はプログレッシブナイフを右手で受け取ると使徒の左肩に突き刺した。使徒はそれを受け距離をとる。

「ミサトさん。式号機のプログレッシブナイフって・・・」

「ああ。シンジ君たちにはまだいってなかったわね。プロダクションモデルのエヴァにはプログレッシブナイフは折りたたみの小さなものではなくて短剣のような物にされたの。だから攻撃力はすごいわよ」

式号機はさらに思いも寄らない行動にでた。

「肩部を除く全制御翼及びバーニアをパージします」

「何ですって!!。アスカ!!」

式号機はバーニアを噴かしたままS型装備をパージ。使徒に当てた。使徒はそれを受け止める。式号機はソニックブレイヴを投げてS型装備を誘爆させ、使徒を地面にたたきつけた。

「おりゃあ!!」

さらに式号機は左手にもプログレッシブナイフを装備して使徒に向かって降下する。使徒はそれに向かって剣を向けるが式号機はそれを左手のプログレッシブナイフで受け流して右手のプログレッシブナイフでコアを突き刺した。

「てええい!!」

全体重を乗せてアタックする式号機。そして使徒は爆発して消滅した。

式号機は初の日本戦を勝利で飾ったのだった。

第漆話 4人目の適格者（前書き）

破の登場人物もはいつてきますよ！

第漆話 4人目の適格者

アスカが初の戦闘を勝利で飾ってから2ヶ月後。

「なぁんで臨海学校行けないの!?!」

本日は中学生なら誰でも楽しみにするであろう臨海学校の日だった。シンジが通う中学校では臨海学校と修学旅行が同じ二年生のときにあるちよつと変わった学校だった。

「何でってあんたたちが臨海学校行ってる間に使徒が来ちゃったらどうするのよ」

ミサトは言う。

「でも当日に言われたら誰でもこうなるわよ!!」

ミサトの不注意というか、本当は忘れていただけなのだが当日にチルドレンたちに不参加を言ったのだ。普通の中学生なら反抗して当たり前である。

「まあいいじゃないの。この時間を使って勉強会でもしましょう。分かってんのよ、あんたたちの成績なんて」

そういつてミサトはディスクをヒラヒラと自分の手で躍らせた。

「そんなこといっても……。僕と綾波は成績良いですよ」

「ゲッ……。ホントだわ……」

シンジは学年順位が三位、綾波は五位だった。ちなみにアスカはドイツの大学をでているにも関わらず百七十四位だった。

「どういふことかしら、これは」

ミサトがアスカにずっとせまる。

「うっ……。だって漢字読めないんだもの、仕方ないでしょ」

さっきまで強気だったアスカが小さく縮こまる。

「そんなことだろうと思って準備したわ。これをやれば誰でも3日間で完璧に慣れる、NERV特製漢字書き取り中学生用!!。これを使えば中学生までに習う漢字なら3日間でマスター出来るわ!!」

そうしてミサトは分厚い冊子をアスカに渡す。アスカは素晴らしくいやな顔をしてそれを受け取る。

「それじゃ、私は用事があるから。じゃーねん!!」

そういつてミサトは部屋を出ていった。

「シンジ、手伝いなさいよ」

アスカはシンジをみて言う。そしてもちろんシンジはこう答えた。

「やだよ」

ミサトは部屋をでてからあるところに向かっていた。そこには学生

時代からの深いつきあいの人がいる。
目的の部屋に到着し、ドアを開けた。

「失礼するわよ」

ミサトは部屋に入る。すると一人の男性が座っていた。

「よお、葛城。久しぶりだな」

「突然だけど、以前から聞きたいことがあってね、加持君」

その男性、加持リョウジと呼ばれる男は座ったままミサトに向き直った。

「なにかな？」

「なぜシンジ君にリリスの存在を教えなくてはいけなかったのか。
あの時はカンフル剤としても使用させてもらったけどやっぱり納得
行かなくてね」

「NERVの人間なら誰だって知ってる。むしろ知らない人間のほ
うが少ないくらいだ。彼が知っていても問題はないはず」

「じゃあなんでアスカやレイには教えないわけ？」

すると加持は黙り込んでしまった。

「黙ってないでなんかいつてよ」

すると加持は急に真剣な趣ではなしてきた。

「俺がここに来た理由はアスカの護衛だけじゃない。これ運びに来た」

そういつて加持は小さなカバンを出した。

「これは？」

ミサトが尋ねる。

「これはセカンドインパクトを引き起こした、第壱使徒、アダムだよ」

ミサトはそれを聞いて驚く。

「なぜあの第壱使徒がここに！？」

「人類補完計画を知っているか？」

「あのゼーレが提唱してる、最悪な計画？」

「そうだ。それをするためにゼーレはアダムを欲しがっている。俺は阻止するために今司令にも内緒で占有してるんだ」

「それって相当危ないじゃない！？」

「俺は俺の中の真実にたどり着きたいだけなんでね。危ない橋だつてそのためならわたるさ」

「で、それとシンジ君がどういう関係に？」

「恐らく、必ず司令とゼーレは決別する。ゼーレと司令が望む人類補完計画は違うからね。そして恐らく人類補完計画を成功に導くのも失敗にさせるのもシンジ君の意志だ」

「???」

ミサトは訳が分からんといった顔をする。

「ゼーレと司令、二つの人類補完計画の要素の中に必ず必要なものが一つある。それが、S2機関をもつエヴァだ。そしてゼーレのもつ死海文書外伝終局の書にはS2機関を手に入れたエヴァ初号機がサードインパクトを引き起こすための必要なピースだと書かれている」

「それじゃあ、シンジ君の意志やそのときの気持ちで人類の運命が決まるの?」

「そうだ。だから彼には知らなくちゃいけない、知った上で自分に託されたものを彼自身感じなきゃいけなかったんだ。そのために君にシンジ君にリリースを見せるよう頼んだんだ」

ミサトは加持の話を聞くと感謝の言葉をいって部屋から出ていった。

「あ、そうそう。あんま危ない橋わたるんじゃないわよ」

そのひとことを残して……。場所を移してここNERVヨーロッパ支部ベタニアベース。

「おい、第捌使徒が暴走したぞ!!」

ここでは永久凍土のなかで氷付けにされていた第捌使徒の研究場所だったがその使徒が今日覚めて暴走しているのだ。

「何とかして辺獄エリアから出さないようにしろ!!」

「エヴァ仮設伍号機をだせ!!。はやくしろ!」

そのころベタニアベースのエヴァ収容倉庫では一人の少女がプラグスーツに着替え、エントリープラグに乗り込んでいた。

「初めての実践になるけどいいわね、マリ」

真希波・マリ・イラストリアスと呼ばれる少女は少し心配するオペレーターに笑顔でピースして答える。とはいっても通常とは異なるプラグスーツなので目がモニターからは見えず、口元だけで表情を感じ取るしかないのだが。

「任せといて!!」

「分かりました。エヴァ仮設伍号機、発進!!」

するとエヴァ仮設伍号機が動き始めた。仮設伍号機はゴーグル型の目をしており、右手にランス、左手にマニキュレーターを装備し、さらに四本足で移動するという変わったエヴァだった。

「わっくわくするな!!」

初めての戦闘というわりには場違いな言葉がマリの口から発せられる。ちなみに彼女はフォースチルドレンになってからまだ半年しか

たっていない。

「どこにいるんだろう？」

マリが辺獄エリアに入って数分探した後、目標の使徒を確認した。

「みーつけた！！」

使徒は龍のような姿をしておりひたすら天井を攻撃していた。

「まさかあいつ、ピントエリアから地上にでるつもり！？。させるか！」

仮設伍号機はランスで使徒を攻撃する。しかしそれはすんでのところでA・Tフィールドに阻まれる。

「これがA・Tフィールドか。けっこうすごいね」

仮設伍号機は距離をとる。すると使徒は尻尾をうねらせて仮設伍号機の横腹にあて、壁に激突させる。

「・・・っ！！。痛いけど、楽しいからいい！」

もともと好戦的なマリの性格上ダメージをうけるとさらに彼女の集中力が上がる。使徒はさらに口を開き、ビームを放ってきた。

「A・Tフィールド、展開！」

ビームはA・Tフィールドによって阻まれる。しかしそれは仮設伍号機を倒すために出されたものではなかった。使徒はビームがつく

った空洞を抜け、地上にでる。

「まずい！」

仮設伍号機もそれを追いかける。

「なにしてる！？。地上にでたら圧倒的に不利だぞ！。なんとかしろ……」

マリはそこで通信を切った。

「うるさいね。仕方ないじゃない、こいつ鈍感だしパワー不足なんだから！」

仮設伍号機は地上にでる。ちょうど霧で視界が悪い。

「……、いた！」

使徒は真っ正面から仮設伍号機に向かってくる。

「ええい！！」

仮設伍号機は使徒の攻撃をかわしてマニキュレーターで使徒に攻撃する。しかしそれはかする程度で逆に仮設伍号機はその後に来た使徒の攻撃に対応できずに吹っ飛ぶ。

「ぐっ……。さすがにそろそろやばいか」

マリは仮設伍号機の限界を感じていた。そもそも地上にでたら仮設伍号機よりも龍の姿をした使徒のほうが有利だ。

「しゃーない。腕の一本くらいくれてやるか!!」

使徒は仮設伍号機に向かって接近。そして右肩を噛みついた。

「ぐううっ!!」

仮設伍号機は脚部からアンカーを出して使徒を完全にとらえる。そしてマニキュレーターで使徒のコアをわしづかみにした。

「ちくしょお、くたばれえ!!」

使徒はコアをつかまれかみつくのをやめみがく。しかしアンカーによってそれは阻止された。

「これでとどめ!!」

仮設伍号機は噛みつきから解放された右腕のランスをコアに突き刺した。

「うおおっ!!」

コアを貫かれた使徒はそのまま爆発した。

「ふう、何とかだったな」

マリは深く息を吐く。

「でもこれで日本にこいつと一緒にに行ける。会えるのが楽しみだな、サードチルドレン、碇シンジ君」

そしてマリは仮設伍号機とともに一ヶ月後、日本に拠点を移すことになる。

第捌話 瞬間、心、重ねて ｝Shall we dance? ｝（前書き）

感想よろしく!!

第捌話 瞬間、心、重ねて (Shall we dance?)

仮設伍号機が第捌使徒と戦っているとき、日本にも第漆使徒が上陸していた。

「目標は第参新東京市に接近しています」

「初号機と式号機を出すわ。発進!!」

そして初号機と式号機は地上に出される。

「シンジ君、アスカ。協力して倒すのよ!」

「分かってるわよ!」

式号機はソニックブレイヴを装備して使徒に接近する。初号機はパレットライフルで式号機を援護する。

「・・・コアが二つ?」

シンジは援護射撃をしながら使徒のコアが二つあるのをみた。

「そこっ!!」

式号機は使徒のA・Tフィールドを瞬時に中和してソニックブレイヴで両断した。

「すごい……。なんであんな動きが」

シンジが関心しているときに使徒は動きを見せた。

「アスカ、まだ動いてるよ！」

「えっ!？」

そして使徒は体を二分して同じ姿をした双子のような物体になった。

「なによこれえええ！」

ミサトもこの状況を見ていた。

「こんなインチキ!!！」

その後、いくら使徒に対して攻撃しても全く効果がなかった。

「もしかしたらお互いにお互いを補完しあってるのかもしれない!!！」

「そしたらどうしろっていうのよ！」

シンジは使徒の攻撃をかわしながら考える。

「そうだ!。ミサトさん、ロングライフルアネストタイプ、すぐに出せますか？」

「麻醉効果の奴!?!。いけるわよ」

「お願いします！」

初号機はできるだけ悟られないように使徒に攻撃を加える。

「シンジ君、用意できたわ!!」

エントリープラグ内ではライフルの出現ポイントを示す矢印が点滅する。

「分かりました。それとライフルを食らわした五分後にN2爆弾を投下してください」

「なんで!?!」

「この使徒は見た目から攻撃に特化したような形状をしています。それと今までの攻撃で容易に組織を破壊できました。なのでN2爆弾を使えば一週間ぐらいは動きを封じれると思います。どちらにしろ現段階で使徒を殲滅することは不可能です」

「なるほど。一理あるわね。いいわ、了解した」

「ありがとうございます」

そしてロングライフルアネストタイプを装備した初号機はねらいを定める。

「いまだ!」

初号機は引き金をひく。そしてそれは使徒に当たり、動きを封じた。

「アスカ、どいて!」

式号機も気づいたようですぐに射程から外れると初号機はついで当
てた。その後初号機と式号機が退却した後にN2爆弾が投下され、
使徒の表面組織を数十%ながら焼却に成功、MAGIの審議の結果、
5日間は活動が静止されることになった。

「とはいってもねえ」

ミサトは始末書処理した後に使徒に対する殲滅方法を考えていた。

「お悩みの様子ね」

リツコが仕事の合間をぬってミサトに話しかけてきた。

「そりゃあそうよ。負けてないとはいえ戦自にN2爆弾の使用を要
求した。まだエヴァの実用性が他の組織には伝わってない状況でよ。
次ミスったら間違いなくクビよ」

「そのクビがつながるアイディア、いるかしら？」

リツコは白衣のポケットから一枚のディスクをひらひらさせる。

「マジで！？。サンキュー、リツコ。やっぱり持つものは友達って
ね！」

ミサトはディスクを受け取り意気揚々と踊る。

「悪いけど、それ考えたのアタシじゃないからね」

その言葉を聞いてミサトはよくディスクをみた。するとそこには
「マイハニーへ」と書かれた字があった。

「よりによってあいつのアイディア……。でも仕方ないわね」

その後、シンジとアスカはミサトに呼び出しを食らう。

「なんですか、いったい？」

「そうよ！。ミサトの家にアタシが呼ばれなきゃいけないってなに？」

「理由は一つ！。シンジが言ったとおり、あの使徒は互いを補完しあってる。いわば一心同体ってわけ。それを打破するためにシンジ君とアスカには5日間の共同生活をすることを命じます」

それを聞いてシンジとアスカは

「はっ？」といったような顔をする。

「命令拒否は認めませんから」

そして打倒第13使徒を目指してシンジとアスカの動きを音楽に合わせて完璧にあわせるユニゾン作戦が開始された。内容は62秒の曲を指定された動きで踊ること。これがそのまま使徒を攻撃する動きになるので体で覚えさせようとする計画である。

初めは乗り気でなかった二人だが使徒を倒すためと徐々にやり始める二人。そして……

「失礼しまーす！！」

使徒との戦闘まであと一日と迫った日に中学の友達、鈴原トウジ、相田ケンスケ、洞木ヒカリが訓練の成果を見に来た。

「どやどや、しっかりやっとりんか？」

トウジたちがリビングに入るとシンジとアスカが踊っていた。

「あっ、来たんだ」

シンジとアスカは踊りをいったん中止して近寄る。

「どうやら結構進んでるみたいだな」

「調子いいみたいね」

そうしてシンジとアスカはトウジ、ケンスケ、ヒカ리를ギャラリ―にして踊りをはじめた。

「・・・、すごい」

ヒカリはそうつぶやいたがほかの二人は言葉にもならなかった。それほどシンジたちの踊りのクオリティーは高かった。まるで左右同人物が踊っているかのような感覚に陥るほど動きがあっていたのである。踊りが終わって出された得点は百点だった。

「ここまでくればもう大丈夫ね」

「そうだね。バッチグーってやつ」

その後中学生一同は外食をして家に帰っていった。
その夜・・・

シンジは寝れずにいた。緊張していたわけではない。ただ、何となく寝れないのだ。隣ではアスカが寝息をたてて寝ている。

「・・・ママ・・・」

「えっ？」

シンジは驚いてアスカのほうをむく。顔を見ることは出来なかったが、確実に泣いている。

「・・・ママ、どうして死んじゃったの？」

その時シンジは思った。アスカはああやって強がる態度をとるけど本当は普通の、むしろ弱い女の子じゃないのかと。シンジはそう思ったのである。

そして決戦当日・・・

「目標、強羅絶対防衛線を突破！」

「MAGIの予想時刻より三時間はやくゼロ地点に到達する予定です」

ミサトはモニターを見つめる。

「エヴァ、及びパイロットの状況は？」

「エヴァ、発進準備完了。パイロットもすでにエントリープラグ内にて待機しています」

「いい、シンジ君、アスカ？」

「大丈夫よ。シンジ、A・Tフィールド全開、フル稼働最大戦速でいくわよ」

「分かってる。62秒でケリをつける」

「目標、ゼロ地点に到達！！」

「よし。エヴァ、発進！！」

ミサトの号令とともにアンビリカルケーブルが切断され、音楽がなくなる。

地上にでると同時に高く飛び上がりビームグレイヴを投げる。

使徒はそれを弾き飛ばすが柄の部分から展開されたビームで両断され、体を二分する。

初号機と弐号機は着地と同時にパレットライフルを装備、使徒にむけて掃射する。その途中で使徒がビームを放ってくるがそれを素早くバク転をして回避。そのまま防御壁をだしてビームを防ぎ、影からまたパレットライフルをうつ。使徒はそれを飛んでかわし、防御壁ごと初号機と弐号機に攻撃する。それを素早くかわす。

「援護射撃！！、弾幕張って！！」

兵装ビルから放たれる無数のミサイルが使徒に当たり爆煙に包まれる。

「はあああっ！！」

初号機と弐号機はそのすきを見逃さずアッパーをおみまいしてその

まま回し蹴りを食らわした。また二分した肉体からひとつになる。

「今だ!!」

そして初号機と弐号機はジャンプして空中で回転すると真っ直ぐ使徒のコアを指してツープラトンキックを食らわした。そして二分するもコアをとらえ続けられて使徒は爆散した。

初めてのエヴァユニゾン作戦は成功したのである。

第玖話 マリ、来日（前書き）

ちよつと話みじかったですね・・・

第玖話　マリ、来日

第漆使徒を倒して一ヶ月後・・・

「ええっ、新しいエヴァ!？」

シンジ、アスカ、レイはミサトから今日、新しいエヴァとチルドレンがくることを知らされた。

「そうよ。んで、この子が新しいパイロット」

そしてミサトの陰から現れたのはマリだった。

「NERVヨーロッパ支部からここNERVジャパンに拠点を移すことになった真希波・マリ・イラストリアスです。よろしく!!」

「彼女はヨーロッパ支部で暴走した第捌使徒を殲滅したパイロットだからすぐに戦力になると思うわ。マリもなにかあったら遠慮なくってね」

「それじゃ、お願いします」

マリは手を挙げてミサトにいう。

「なにかしら？」

「あの子を強化、改修処理を施してほしいの」

マリは仮設伍号機を指差す。

「あの子、第捌使徒戦で鈍感でパワー不足だったのがわかったのだから」

「強化してほしいポイントは？」

「まず、電力供給を従来型のエヴァと同じようにアンビリカルケーブルにしてほしいのと義手パーツを普通の手にしてほしい。その時に元々装備してたランスは通常装備として持たせてほしい。そんなもんな」

「分かったわ。やってみる」

そして仮設伍号機の改修処理が始まった。

「まったく、わがままもいいとこねえ」

ミサトの部屋を出るとアスカがマリにいった。

「これからはもっと強い使徒と戦うかもしれないのよ。実際に戦ってるのは私たちなんだからこれくらい通らなきゃやってられないわよ」

マリはアスカを敵対視する目でいう。

「喧嘩はやめようね・・・」

シンジはやや控えめに言う。マリとアスカはしぶしぶそれに従った。

「そーいえばさ、バチカン条約第13条第1項は適用されちゃうん

じゃないの？」

アスカはふと思った疑問を言う。

「バチカン条約って？」

シンジはこうゆう細かいことは知らない。

「バチカン条約第13条第1項、各国の戦力差を均等にするため、各国が所有できるエヴァは三機までとする」

レイがシンジの質問に答える。

「あんたたちなにも知らないの？。NERVジャパンだけは特別なのよ。ここは本部で使徒が一番出現する確率が高いポイントでしょ？。だから、NERVジャパンはこの条約には引っかけられないのよ」

マリがメガネをくいとあげて話す。

「へえ」

シンジは感心したようにいった。そしてその時、警報が鳴った。

「使徒ね。急ぐわよ！！」

そしてシンジたちはロッカールームに駆けていった。

第一発令所では使徒の姿がモニターされていた。

「使徒の間で天使の格好するの流行ってるのかしら」

ミサトはエヴァを天使の姿にすこし変えたような姿の使徒をみて言う。

「状況は？」

「使徒側から行動は見られません」

「エヴァ伍号機はまだ出せないわ。初号機と零号機を出撃、弐号機は待機よ」

「ええっ、なんでよ！」

アスカはミサトの指示を聞いて反論する。

「零号機は久しぶりの戦闘。これを補佐するにはアスカよりも最初から関わってるシンジ君のほうが適任なのよ」

「・・・分かったわよ」

アスカはしぶしぶ従った。

「シンジ君、使徒はまだ動きを見せてないけど油断しないで。レイ、シンジ君と協力して」

「了解」

初号機と零号機はパレットライフルを装備して使徒に向かった。

「あれか・・・」

使徒は依然動きを見せずにいた。

「・・・来る！！」

レイが言ったタイミングで使徒は右手を零号機にむけ、ビームを放った。零号機はA・Tフィールドを展開してそれを防ぐ。

「綾波！」

「大丈夫よ」

それを聞くと初号機はパレットライフルを放つ。それはA・Tフィールドを展開されて防がれた。

「相手はこちらと一定の距離を保ってる。てことは遠距離型か！？」

初号機はプログレッシブナイフを装備するて使徒に接近した。使徒はそれを確認するとビームを放つ。初号機はそのビームをかわすが衝撃で吹っ飛ぶ。

「くっ・・・。綾波、僕が防御するから気付かれないように近づいて攻撃して！」

「分かったわ」

初号機は使徒を零号機に背中を向けるように誘導して攻撃した。使徒が放つビームをA・Tフィールドで防ぐ。

「今だわ」

零号機はプログレッシブナイフを装備して使徒に近づきコアにナイフを突き立てた。使徒はそのまま爆散した。

第玖使徒を殲滅に成功した。

第拾話 奇跡の価値は（前書き）

サブタイトルつけるのって結構考えますね・・・

第拾話 奇跡の価値は

月面、タブバベース

「いやあ、やはりやってくれるね、サードチルドレンは」

月面のどこなのかは分からないが棺が何個か並んでいる所に一人の少年が立っていた。

「さすが、一線を抜きんでる存在だね」

その少年は銀髪で赤い目をしていた。その赤い目で地球を見つめる。

「アダムとリリス、その祖先たちが自らの生存権を勝ち取るために戦いをしている星がこんなにも美しいとは皮肉だな」

少年はそう言うと言き出して広い空洞のある場所に行く。そこには建造中のエヴァが二機、存在していた。

「そう思わないかい、甲、乙号機？」

そのエヴァは甲号機、乙号機と呼ばれていた。それぞれ、従来型のエヴァとは異なる姿をしているのを建造途中にも関わらず確認できる。

「僕が目覚めたってことは第拾使徒が現れるのかな？」

少年が再び地球を見ると衛生軌道上に巨大な生物を見つける。

「さあ、これからは死海文書外伝掟の書から終局の書序章に行を移す。僕の出番はまだだけどそう遠くないな」

少年は高く上を見上げた。

「あえるときが楽しみだよ。碇シンジ君」

そして少年は月内部にある施設に入っていた。

一方、地球では・・・

「第6サーチ衛生より目標のデータ情報受信確認！。モニターに映像を回します」

モニターに現れたのは辛うじて、目玉のような本体に手のようなものがついた本体のようなものが見える黒い固まりが映し出された。

「常識を疑うわね」

ミサトは驚きの声をあげる。

「目標は体の一部分を切り離して地上に投下させています」

そしてモニターの半分が投下されたポイントを示していた。

「さすがはA・Tフィールド。大した破壊力ね」

「落下のエネルギーと質量も利用しています。使徒そのものが爆弾みたいなものですね」

「取りあえず、初弾は大はずれ。でもその後は誤差修正している」

リツコがモニターをみてそういう。

「現在の状況は？」

「使徒の放つ強力なジャミングのため消息は不明」

「多分、来るわね・・・」

「ええ、今度はここに。本体ごと。どうするの、ミサト？」

ミサトは考え込んだ。

「今思いつくのはこれしかないのよね・・・」

そしてミサトはシンジたちを会議室に呼んだ。

「使徒を受け止めるうう！？」

「そう。現段階で使徒は必ず本体ごとここにアタックしてくることが分かってるわ。それをMAGIでリアルタイムに予想降下ポイントをエヴァに送ってもらってそのポイントにいち早くついたエヴァが受け止める。残ったエヴァは素早く使徒のコアを貫く。MAGIの先ほどもらった予想降下範囲はこれよ」

モニターには予想降下範囲が示されている。

「ほぼ全域じゃないですか！！」

「これを成功させたらまさに奇跡だね」

マリがそうつぶやく。

「奇跡は起こしてみても初めて価値がでるものよ？。それと今作戦は死ぬ危険性が高いから一応遺書を書いてもらうようになってるんだけど・・・」

するとアスカは手を前に出して拒否した。

「そんなん書かなくたって、死ぬ気なんてさらさらないわよ。縁起でもないこと言わない！！」

「まだ日本に来てぜんぜんたってないのに死にたくなってる」

「私はまだ死ねないの。だから、必ず成功させる」

「ミサトさんはヤシマ作戦の時、僕を信じてくれました。だから今度は、ミサトさんを信じます」

「みんな……。ありがとう」

シンジたちの顔は決意で満ちあふれていた。

「じゃあ、作戦時間まで自由にして大丈夫よ。あまり時間はないけど」

そしてみんなは解散した。

そして作戦時間・・・

「エヴァに乗ってくれた、それだけでも感謝するわ。ありがとう。みんなの命、あなたに預けるわ」

初号機、零号機、式号機、伍号機は各指定ポイントに待機していた。

「作戦開始と同時にアンビリカルケーブル切断。その後、MAGIの予想降下ポイントに向かって走っていった。その後の判断はあなたたちにゆだねるわ。頑張ってるね」

「了解！！！！」

そして・・・

「目標、最大望遠で確認！。距離、二万五千！！」

「おいでなすったわね。シンジ君！！」

「いくよ、アスカ、綾波、マリ。・・・スタート！！」

シンジのかけ声と同時にアンビリカルケーブルを切断して各エヴァが走り出した。シンジたちは横目でMAGIの予想降下ポイントを確認しながら走る。

「距離、七千！！」

「もっと速く、もっと！！！」

「初号機、シンクロ率上昇！！」

初号機は疾風のごとく第参新東京市を駆けていく。そして初号機は使徒の真下に到着した。

「A・Tフィールド全開!!」

見事に初号機は使徒を受け止めることに成功した。しかし一機だけでは保つのも時間の問題だった。

「くっ・・・う」

「とうちゃーく!!」

伍号機が次に到着してA・Tフィールドを展開、使徒を押し返す。

「式号機、フィールド全開」

「やってるわよ!!」

その後ほぼ同タイミングで零号機と式号機が到着してさらに使徒を押し返す。

「綾波、今だ!!」

零号機はA・Tフィールドに切れ目をいれてコアの部分だけこじ開ける。

「マリ、借りるわよ!!」

式号機は伍号機のランスをかりてそのままコアを貫いた。そしてA・Tフィールドが消失して使徒は爆発した。

使徒殲滅後、シンジたちは会議室にきていた。

「あなたたち・・・」

ミサトは笑顔で帰ってきたシンジたちに感謝の言葉を述べた。

「南極の碇司令と通信がつながっています」

「おつなぎして」

するとsound onlyとモニターされた画面がでてくる。

「申し訳ありませんでした。私の独断で初号機を中破させてしまいました。処罰は受けます」

ところが帰ってきた返答はそんなものではなかった。

「いや、むしろこれぐらいの被害ですんだのは幸運であろう」

「ああ、問題ない。葛城三佐、初号機パイロットはいるか？」

「は、はい」

シンジは呼ばれて返事をする。

「話は聞いた。シンジ、よくやったな。葛城三佐、あとは任せる」

「分かりました」

シンジは初めてもらった父からのほめ言葉にとてもうれしさを感じていた。

「いかなる生命の存在も許さない死の世界、南極。地獄と言うべきだな」

「だが我々人類はこうしてここに立っている」

冬月の言葉にゲンドウは答える。

「科学の力で守られているからな」

「科学はヒトの力だよ」

「だがその傲慢が15年前の悲劇、セカンドインパクトを引き起こしたのだ。結果、この有様。与えられた罰にしては大きすぎる」

「だが原罪の汚れなき浄化された世界だ。残る使徒もあと7つ」

ゲンドウはその甲板にある棒状のものをみて言う。

「さらにこの槍を手に入れたことにより我々人類は約束の時まで少しばかりの時間の猶予を手に入れたことになる」

ゲンドウは不敵に笑った。

「ついに第拾使徒を倒した」

暗闇の中にいくつかのサンバリングが施されたモノリスが浮かぶ。

「第参使徒サキエル、第肆使徒シャムシエル、第伍使徒ラミエル」

「第陸使徒ガブリエル、第漆使徒イスラファエル、第捌使徒ゲオルギウス、第玖使徒ラファエル、第拾使徒サハクィエル」

「着々と準備は進んでいる。死海文書外伝も掟の書から終局の書序章に変わった」

「これからが本番だ。碇もロンギヌスの槍を回収した」

「うむ。このまま計画通りにいくとしよう」

「全ては人類補完計画のために」

そしてモノリスが消えた。

これから起きることはまだ誰にも分からなかった。

第拾巻話 運命の出会い（前書き）

ここからは学園ラブコメ路線で行きます!!!!

第拾巻話 運命の出会い

第拾使徒を倒して数日後・・・

「今日転校生がくるんだってよ!」

ケンスケが教室に入ってくるなりシンジに近寄っていった。

「転校生って・・・」

「結構レベル高いらしいぞ」

すると担任の先生が入ってきた。

「もう噂にもなっているだろうが今日は転校生がきます。入ってください」

すると茶色に赤を混ぜたような髪の色をした、まさに中学生っぽい女の子が入ってきた。

「霧島マナです。よろしくお願いします」

「霧島さんの席は碇君の隣です」

マナはシンジの隣の席に座った。

「よろしくね」

「う・・・うん」

そして昼休み・・・

「シンジ君！」

マナがシンジに近寄ってきた。

「どうしたの、霧島さん」

「この学校って屋上上がれるの？」

「うん」

「私、シンジ君と見たいなあ」

「そ、そうなんだ。それじゃあ、いこうか」

「うん!!」

そしてシンジとマナは屋上にでた。屋上からは第参新東京市とその向こうに山々が見える。

「きれいなえ」

「山が、でしょ？」

シンジは笑いながら言う。

「どうして私の思ってることわかったの!？」

「僕も始めてきたとき、っていつでも結構後だけど風景がきれいだなって思ったことあったからさ。もしかしてって思ってた」

「へえ」

マナはそう言ってまた外を見る。

「そうだ。修学旅行の班、もう決まったの？」

今回、シンジたちチルドレンも修学旅行に参加はできるようになった。ミサト曰わく、臨海学校にも修学旅行にも行けないのは嫌ですよというものらしい。

「ううん、まだ」

「それなら僕の班にきなよ。アスカや委員長、綾波もいるからさ。友達作るのにもちようどいいよ」

「ほんと!?!。ありがとう!」

マナは微笑みながらはしゃぐ。班が決まったことよりもシンジと同じ班ということが嬉しいらしいがシンジ本人は全く気づいていない。

「それじゃあ、委員長にいつとくからさ。次のホームルーム、行く場所きめるから、なんか考えといて」

「はーい!」

そして次の授業

シンジの班はシンジ、トウジ、ケンスケ、レイ、アスカ、マナ、ヒカリというメンバーになった。

「舞台は沖縄！楽しみやでえ！」

トウジは場所が沖縄というだけあって人一倍楽しみらしい。

「それじゃあ、みんなどこに行く？」

ヒカリがみんなを仕切る。それをサポートするのはシンジだ。

「はいはい！。わたし、水族館に行きたい！！」

アスカは手を高らかにあげて言う。

「私は・・・、ここ。アスカと同じどこにいきたい」

レイもアスカに賛同する。

「私は首里城がいいな！」

マナはそういう。

ケンスケ、トウジは海に入れればいいらしいのでそれに賛同。ヒカリとシンジはそれで十分自分たちも楽しめると判断したのか、それでオーケーという結論に達した。

「それじゃあ、班別行動はそれで。あと三日目の日はバラバラになって那覇市散策になるけれど出来るだけ班の人とバラバラにならないようにしてね」

「はい!!」

ヒカリの言葉にみんなが反応した。

そして放課後・・・

「シンジ君!!」

マナがシンジに近寄ってくる。

「これからNERVに行くんでしょう? 私も連れてってくれない?」

「だめなんだ。関係者以外は入っちゃいけないようになってるから」

「なーんだ。残念」

「家まで送ってくよ」

「ほんと!?!。ありがとう!」

そしてシンジとマナは一緒に帰ることになった。

「シンジ君がいて安心しちゃった。最初はどうなるかと思ったけどね」

「マナはなんでこけに転校してきたの?」

「家の用事。って言っても親は故郷にいるから今は一人暮らし」

それを聞いてシンジはひどく心配する。

「大丈夫なの？。一人で」

「慣れてるから」

「そっか・・・」

そして一緒に歩くこと数十分、マナの住んでいるアパートについた。

「ありがと。楽しかったわ。またね」

「うん。じゃあ、また明日」

そしてシンジはマナと別れてNERVに行った。

「シンジ。遅かったじゃないの」

入り口でアスカが立ってシンジを待っていた。

「ごめん。霧島さん、家までおくってたからさ」

「なーんか、怪しい」

「そんなこというなよ」

そしてシンジとアスカは実験をして帰って行った。

「加持君、例の物はどうしたんだ？」

司令会議室で加持と冬月がはなしている。

「それが、まだ私の手に渡っておりません。どこかでとどまっているのでしょうか」

「あれが老人たちの手にわたったら事は重大だ。くれぐれも早期に回収を頼むよ」

「そのつもりです。ではこれで」

そして加持は部屋を出ていった。

「あいつはまだ使える、今捕らえるのは得策ではない」

「だが・・・」

「ロンギヌスの槍もこちらにある」

「そのロンギヌスの槍は？」

「問題ない、いまレイが作業をしている」

セントラルドグマ、その最下層。

零号機がロンギヌスの槍を持って南極を模した場所をあるっている。そして目的の場所、第式使徒リリースの目の前で歩みを止め、槍を構えた。そしてリリースの胸部に槍を突き刺した。

レイ自身、この行為がどのような意味をなすのか理解できずにいた。無論、シンジになど分かるはずもなかった。

第拾弐話 修学旅行で（前書き）

学園ものって難しいですね・・・

第拾弐話 修学旅行で

霧島マナが転校してきてから1ヶ月後

「修学旅行や〜!」

トウジが体育館のなかではしゃぐ。そう今日は修学旅行なのだ。シンジ達も今回は参加が許されている。というのもマリが実は学校に通っていないのがあるのでマリは本部待機、マリは「私がいるからお構いなく」といったような素振りを見せてシンジ達を修学旅行に行くことを勧めた。

「沖縄かぁ。楽しみだなあ」

「そうね〜。シンジ君と行けるのが嬉しい!」

マナは朝っぱらからシンジ独占モードに入っている。シンジには冷たい視線が送られる。

「き、霧島さん。班ごとに並ばないと怒られるよ!」

「は〜い・・・」

マナはシンジの言うとおりに従って並んだ。

「生徒諸君!。今日は待ちに待った修学旅行である!。怪我をしないで存分に楽しんでこい!」

「ハ〜イ!」

そうして沖縄目指して出発した。バスと電車を利用して数時間後には那覇空港についた。

「やってきたぞ、沖縄!!」

トウジは降りるやいなや大声で叫ぶ。

「恥ずかしいでしょ!。バカトウジ!!」

ヒカリがトウジにげきをいれる。

「す、すまん・・・」

そんなこんなで一同が一日目に午前11時に沖縄に来た理由はこれからわかる。

「海やう!!」

これまたトウジが叫ぶ。もちろんヒカリに怒られるのは言うまでもない。

「みんな、着替えてこーい!!」

そうしてみんな思い思いの水着をきて出てくる。

「シンジ!!」

「碇君・・・」

「シンジ君!!」

シンジがあまり派手でない水着をきてさて泳ごうかなという時にアスカとレイとマナがシンジに近寄って話しかけてきた。

「みんな・・・、どうしたの？」

レイは白いワンピースの水着バージョンのようなもの、アスカは赤と白を基調とした横縞模様の水着を、マナは白を基調としたこれまたシンプルな水着をきてシンジに近づいてきた。シンジは正直目のやりどころに困って顔を見るようにつとめる。

「実は・・・その・・・」

アスカが恥ずかしそうに顔をほのかに赤くしながら言う。

「碓君、私たちに泳ぎ方を教えてほしいの」

レイが単刀直入に言う。

「泳げないのよ。困ってて」

マナは舌を出しててへっといったような顔をして言う。

「シンジって一応なんでもできるでしょ？。だから・・・」

シンジは学校の中ではシンジにスポーツをやらせれば必ずいい成績を残せるという噂がたっていて、実際に水泳に関しては全国一位を経験している強者だった。

「別に構わないけど……。みんなから変な目で見られるよ？」

「泳げないほうが嫌!!」

「分かったよ。しかしアスカが泳げないなんて知らなかったな」

「仕方ないでしょ!。苦手なんだから」

そして四人はとりあえず海にはいる。といっても入れたのはレイだけ。アスカとマナは全く動かない。

「仕方ないな……。ほら!!」

シンジは足がつくところでアスカとマナの手を引き海にいれる。

「キャアアッ!!」

「イヤアアッ!!」

同時にアスカとマナが叫んでしまい、周囲の人が一斉にシンジをみる。

「ちょ……。ちょっと!!」

シンジには冷たい目線が注がれる。

「なんか僕が悪いことしたみたいじゃないか!」

「当たり前よ!。泳げないって言ってたじゃない!」

「水が嫌いなままならいつまでたっても泳げるようにならないよ！」

そうしてシンジのレッスンが開始された。

レイに関しては本当に泳ぎ方を知らなかったただけなので泳ぎ方を教えると容易にそれを成し遂げた。

「ありがとう、碇君」

そうしてレイはシンジの周りをバシャバシャと泳ぎ始めた。

アスカに関しても最初はおびえていたものの徐々に慣れが出てきて一時間後には泳げるようになっていた。

「まあ、二割くらいはシンジのおかげかな！」

そういつてヒカリの所へ泳いでいった。

「それで・・・」

「あはは・・・」

残るはマナだけなのだが凄まじく水が嫌いで顔をつけられない。

「じゃあ・・・、とりあえず少しでもいいから顔をつけてみようか」

「う・・・、うん」

マナの体はガタガタと震えている。まずはこの恐怖心をとらないと指導のしようがない。

「・・・!!」

決心したのかマナは顔を水につけた。最初は目をつむっていたが徐々に目を開ける。すると水の中で笑いながらマナを見ているシンジが目飛び込んできた。

「・・・!」

マナは急にされて驚いたのか顔を水からはなしてシンジをたたく。

「なにするのよ!。溺れたらどうするの!?」

「ごめん、ごめん。でもふるえはとれたでしょ?」

マナは自分の手をみる。シンジの言うとおり、ふるえはいつの間にか無くなっていった。

「さて、こっからが本番だよ」

そしてシンジはマナに泳ぎ方を教え始めた。とは言っても初めから補助なしでいけるほどマナも器用ではないのでシンジがマナの手を持ちながら泳ぐことにした。

「体はできるだけ水平にして足は必要最低限上下に動かして」

「うん」

何回かそうしていくうちにマナ自身コツがつかめてきたのかだんだん形にはなってきた。

「さて、これくらいかな・・・」

するとシンジは急にマナの手を放した。

「・・・!?!、ダメー!!」

マナは驚いたのか藁をもつかむ勢いでシンジの腕をつかむと抱きついてきた。

「き、霧島さん!!」

シンジはマナの行動に驚いて倒れる。

「ゴボゴボ・・・」

シンジは体を起こしてマナと一緒に砂浜にでた。

「なんで急に手を離しちゃうのよ!!」

「なんでって、ちょっと、その、大丈夫かなあって・・・」

「そんなわけないでしょ!!」

「ごめん・・・」

「シンジ君のいじわる・・・」

それっきりマナは黙り込んでしまった。

「霧島さん？」

シンジはマナの顔を覗く。マナは涙目だった。

「あ、その・・・」

シンジは自分のしたことを少し後悔した。シンジはこの状況をどうするか悩みに悩んだ。

「・・・ごめん」

「許さない」

「う・・・」

「シンジ君がもし、明日の自由行動と一緒にしてくれるならいいよ」

「綾波とかアスカと一緒に・・・」

「そんなんダメよ!!」

「でもそしたら霧島さんがこれから迷惑しちゃうよ・・・」

「そんなの言わせとけばいいの!」

シンジはどうするか考え込む。レイはいいとしてもアスカが黙っちゃいない。

「・・・分かった。僕も腹をくくるよ」

「ありがとう!!」

するとマナは今までのが嘘のように振る舞う。そこで時間がきてしまった。

「今日はここまで!!。みんな、着替えて食事!」

その後、シンジたちは夕飯をすまして風呂にはいり、床についた。

「明日はなんだかんだいったのしみだな」

シンジは明日のことに胸をふくらまして深い眠りについた。

深夜遅くシンジの部屋に入って物を物色する人物に気づかないまま・
・。

第拾参話 シンジとマナ（前書き）

今回は短いですがどうぞよろしく

第拾参話 シンジとマナ

修学旅行二日目・・・

今日は半日班行動、それから自由行動というスケジュールである。

「ここが首里城かぁ!!」

シンジたちは首里城に見入っていた。その昔、日本とはまた違う国が独立して存在していた沖縄。それを現在まで建築という姿で残している数少ないものだ。

「神々しいね・・・」

シンジが不意につぶやく。ほかのみんなも同感した。

「こんなんがすごい大昔に建てられて実際に人が住んでたなんて信じられない・・・」

「色々見てみましょう!」

その後、時間になってみんなが集合した後、自由行動になった。

「さぁ、自由行動!!。シンジ、行くわよ・・・ってどこ行っちゃったのかしら!!」

アスカはシンジがないのに気づいて探し始める。

「碓君ならさっき霧島さんと一緒に町の方行ったわよ」

「なっ、ぬあんですって!?!」

アスカがそれを聞いて叫ぶ。

「どこに行ったとか聞いてないの?」

レイもそのことを聞きつけヒカリに尋ねる。

「いいえ、聞いてないわよ」

「そう・・・」

それっきりレイはうつむいたまま話さなくなった。

「ファースト、シンジを探しに行くわよ!!」

そしてアスカはレイの手を引きシンジを探すべく走り出した。

「じゃあ・・・、行こうか、鈴原」

「お、おう」

ヒカリとトウジは手を取り合って歩いていった。

「ねえ、霧島さん」

「なあに、シンジ君?」

「お腹すかない?。ずっと移動しっぱなしだからさ」

「うーん、確かに……。どっかいところある？」

「うん。僕の知り合いの店でいいところがあるんだ。案内するよ」

「ホント！？。ありがとう！！」

そして沖縄料理専門店「サルバトーレ」に入っていった。

「へい、いらっしやい！。シンジ君、久しぶりだね」

「お久しぶりです」

「おっ、隣の子は彼女かな？」

「ちっ、違いますよ！！」

「はっはっ、そんなに顔赤くしながら言わなくてもいいだろう。ご注文は？」

シンジとマナはソーキそばを頼んだ。

「いただきます！！」

シンジとマナはそれぞれそばを口に運ぶ。

「おいしー！！」

「そうかい、そういつてくれると助かるな」

シンジとマナは昼食をすますと水族館やその他観光名所にいった。

そして最後に船にのった。

「海風が少し冷たいね」

「でも気持ちいいわ・・・」

二人はずっと黙ったまま海をみる。

「そうだ、シンジ君」

「なに？」

「私のこと、マナって呼んで」

シンジは急に言われてびっくりした。

「どうしていきなり！？。僕はそんなキャラじゃないよ！」

「じゃあ、みんなにこのこと言いふらしちゃおうかな」

マナはどうしても呼んでもらいたいらしく引き下がらない。

「わ、分かったよ。・・・、マナ」

「なあに、シンジ？」

「その、恥ずかしいね・・・」

「これからはこう呼んでもらうわよ！」

「分かったよ」

こうしてシンジとマナは二人仲良くみんなのところに戻った。

このあとにアスカ、トウジ、ケンスケによってしつこく迫られたのは言うまでもない・・・。

その夜・・・

「状況はどうだ？」

携帯から発せられる声はとても重々しかった。その携帯を持つのはマナだった。よく見ると携帯に小さく線自の文字が刻まれている。

「すみません。ここでこんな言い分をするのは何ですが現時刻を持って霧島マナは戦略自衛隊を抜けます」

「なにをバカなことを！？。自分の言っていることがわかっているのか！？」

「はい。こんなばかばかしいことはもう止めます」

「そうか。そう言ったこと、後悔するなよ」

「問題ありません。すでに籍はNERVへ移させてもらってますので」

「我々を甘くみるなよ」

そういつて電話は切られた。

「さて、どうしようか・・・」

NERVに守られているとはいえ、とても不安なマナはその不安を抱えたまま眠りにはいった。

第拾四話 別れ（前書き）

とりあえずここで一区切りです

第拾四話 別れ

修学旅行も無事終わり、いつもの日常に戻ろうかというとき、事件が起こった。

「マナの家が燃えてる!？」

シンジたちがその情報を聞いたのは修学旅行から帰ってきて次の日の夕方だった。急いで駆けつけるとその情報どおりに燃えていた。

「マナは!？」

シンジは思わず家に向かって駆け出す。

「その君、下がって!!」

消防隊の一員がシンジの進路を阻むように現れて注意をする。

「友達がいるんです!!」

「分かってる。任せておけ」

そうして数時間後・・・

「マナは!？」

活動を終えた消防隊のひとりにシンジが聞く。

「悪いが人を見つけることは出来なかった」

「そんな・・・」

「だか遺体らしきものも見つからなかった。代わりに不燃性のもので書かれたこんなものを見つけた」

それをシンジに渡すとシンジはそれをみた。

「NERVのみなさんへ

あなた方の一員となっている霧島マナですが本人の目に余る行動が示されたので監禁させてもらいました。ですので霧島マナの籍を破棄していただければ本人を返したいとおもいます。できるかぎりご協力を

S・S・D・F」

これと呼んでシンジはとりあえずミサトにこのことを話した。

「ミサトさん。マナを助けないと！」

「ええ、そうね。ただ情報が少なすぎる・・・」

そこでシンジの携帯が鳴った。ケンスケからの電話だった。

「どうしたの？」

「あのさ、その手紙のことなんだけど最後にアルファベットが並んでるじゃない？」

「うん。でもなんか関連性がないんじゃない？」

「ところが太アリ！！。あのアルファベットって戦自が極秘文書や重要書類を記すときに絶対にいれるものだったんだよ」

「ホント！？」

「んで、気になって戦自のデータをハッキングしたらなんと霧島マナは戦自の少年兵だったの！！」

「なんだって！？」

シンジは大声を上げる。

「ただ、今は経歴抹消。これが本当だったら下手したら殺されるぞ。俺はこれしかできないけどNERVならなんとかなるだろ。シンジ、頑張れよ」

そういつて電話は切れた。

「シンジ君。彼女はNERVに助けを求めてきたの。だからNERVの管轄内に置いた」

「彼女を助けないと」

「ええ。とりあえず緊急会議を開くしかないわね」

そうして会議が開かれた。NERVの一員が監禁されたのでみんな焦っていた。

「とりあえず、戦自の目的は秘密を知っている霧島さんの監禁もしくはそのまま記憶操作か最悪殺害といったところでしょいか」

「そうね。でも、そんなことさせないわ」

「葛城さん。これが霧島さんがロストした地点です」

ミサトがそれを受け取るとマナがロストした地点は戦自の諜報部管理下の場所だった。

「これで確実ね」

「どうやって助けます?」

ミサトは考え込むがほどなくして顔を上げる。

「何かありました?」

「フフン、チョツチね。思い立ったら即行動!!」

そして霧島マナ救出作戦が開始された。

「まずは非常事態発令を出してエヴァ三機を出撃させます。その後、エヴァ各機は戦自施設を攻撃、霧島さんは発見次第回収して。発令がでてるから民間人にも見られることはないわ」

「大胆な作戦ですね」

「大胆かつ繊細に、が私のモットーよ」

そして作戦は開始された。

「非常事態発令を出して!!」

ミサトの声とともに発令が出され民間人は避難していく。

「エヴァ、発進!!」

そうしてエヴァが発進する。

「いい?。一気に攻め込んじやいなさい!」

ミサトがシンジたちに言う。

「私たちにケンカ売ったこと、後悔させてあげるわ!!」

エヴァ三機は戦自施設を次々と破壊していく。

「悪かった!!。降参する!」

程なくして戦自の最高官とおぼしき人がNERVに通信を開いた。

「今から霧島を解放する!。だから・・・」

「おとなしくそうすればいいの。まったく・・・、たかが日本の自衛隊が国連部隊にたてつくからこうなるのよ」

そうして事件は解決した。

そしてその後・・・

「マナ、本当に行っちゃうの？」

シンジとマナは芦ノ湖の見える丘にいた。事件解決後、戦自のいる場所はマナにとって危険と判断され、遠くの町に引っ越されるようになった。

「うん。ここだとみんなに迷惑かけちゃうから」

「ミサトさんの家に引き取ってもらえば。僕やアスカだっているし」

「そしたらシンジたちを巻き込んだじゃうかもしれない」

「やっぱり、ダメなんだね」

「うん・・・」

長い沈黙。風は二人の髪を揺らしていた。

「マナ。一段落したら君を迎えに行くよ。必ず、いつかきつと」

「ホント!？」

「ホントだよ」

「うれしい・・・!」

そして時間が来た。

「ごめんね。時間が来ちゃった」

そういつてマナは車のほうへ走っていく。

「・・・待ってるから!!」

そういつてマナは車に乗り込み、去っていった。

「待っててね。いつか、必ず」

シンジは悲しくはなかった。いつか絶対に会いに行く。その決意を胸に秘めていたから・・・。

第拾伍話 科学の力（前書き）

久しぶりに更新です

第拾伍話 科学の力

マナが去ってから一ヶ月後、すっかりシンジは切り替えていた。

「おはよう、みんな」

「おはようさん」

珍しくトウジが学校にいたのでびっくりした。

「どうしたの、はやくない？」

「いやなあ、人に呼び出されたっちゅうか」

「誰に？」

「メガネかけた女の子や。これからは気をつけろゆうて帰ってしも
うた」

「マリか……。そっか」

そして学校が終わり、シンジはNERVへ行った。

「あ、いたいた。マリ！」

通路を歩いていたところをシンジは見つけ、声をかける。

「なにかな、ワンコ君」

修学旅行から帰ってきてからマリはシンジのことをワンコ君と呼ぶようになった。なぜこうなったのかは分からないが……。

「今朝、トウジに言っただけを付けてってどういう意味？」

「にゃ!?!。しゃべっちゃったのか……。まあいいか。その言葉どおりだよ」

「君がいったことがふつうじゃ感じさせないんだけど」

「まあ、いずれわかるにゃ。それより、今日は模擬体をつかったシンクロテストだよ。急いで準備しなきゃ」

そういつてマリは走って行ってしまった。

「まあ、いいか」

そうしてシンジは模擬体のシンクロテストに入った。

「シンクロテストって普通にやればいいじゃない!。なんで裸になんきゃいけないの!?!」

「そっちのほうに正確にデータが取れるのよ。モニターにはモザイクかかるし、誰もみないわよ」

だだをこねるアスカをリツコはそう言って制する。

「分かったわよ!?!」

そしてテストが始まった。

「うん。いいわね」

リツコが次々と出されるデータをみて頷く。

とその時、ブザーが鳴った。

「何事!？」

「タンパク壁から高エネルギー体が侵入!!」

「レーザーで熱処理!!」

レーザーが部位に掃射されるがそれはA・Tフィールドによって防がれた。

「A・Tフィールド!？」

「パターン青。使徒です!」

「何ですって!？」

その情報はすぐにゲンドウ不在のため、冬月の耳に届く。

「使徒の侵入を許したのか!？」

「申し訳ありません」

ミサトが通信で一応のわびを入れる。

「言い訳は構わん。セントラルドグマの全隔壁を緊急閉鎖!!。物理的遮断をしろ!!」

使徒はその後も侵攻を続ける。

「・・・!!。使徒からMAGIがハッキングを受けています!」

「クラッキング、急いで!」

オペレーターたちはキーボードを叩いて必死に抵抗する。

「くっ!、早すぎる!!」

「メルキオール、制圧されました!!。メルキオールがバルタザールをハッキングしています!」

「くそ!、間に合わない!!」

「ロジックコードを三秒から六秒単位に切り替えて!!」

リツコが駆けつけて言う。

「はい!!」

すると使徒のハッキングが押しとどまった。

「これで少しは保つでしょ」

「再度侵攻は十時間後と予想されます」

「まさかMAGIが敵に回るとはな」

「しかも自爆決議がメルキオール、了承。バルタザール、カスパー、否決。けどこのままいったらマズいぞ」

「細菌サイズの使徒が知恵を付けてきている……。いけるわ」

そう言ってリツコはみんなを集めた。

「どうするのかね？」

冬月がりツコに尋ねる。今回の使徒はエヴァによる殲滅が不可能なのだ。

「今回の使徒は確実に知恵を持っています。そして彼らは急激に進化を遂げています。ならば、こちらから進化を促進させればいい」

「なるほど。進化の最終地点は死、そのものだからな」

「君が早いか、使徒が早いか、勝負だな」

そうしてリツコは進化促進プログラムを作り始めた。

そして五時間後・・・

「プログラムが完成したわ。マヤ、プログラムをダウンロードさせたらロジックコード、元に戻して。後は使徒が死ぬまで私とマヤでプログラムの調整をするわ」

「わかりました！」

「それと、母さんにも力を借りようかしら」

そういつてリツコはカスパーの小さな入り口を開けると中に入っていた。

「すごい！！。裏コードがこんなにたくさん！。これならいけますね、先輩！！」

リツコはカスパーのハードディスクの一部に切れ目を入れて外し、自分のパソコンとマヤのパソコンをリンクさせた。

「準備、完了ね」

「いきますよ、先輩」

「ええ」

するとマヤはロジックコードを元に戻した。使徒の侵攻が再開すると、同時にリツコがプログラムをダウンロードさせる。

「やはりすぐといくわけにはいかないわね。マヤ！！」

「はい！！」

リツコとマヤはものすごいスピードでタイピングが開始される。

「後少しでバルタザールが・・・！」

そしてバルタザールが乗っ取られた。

「リツコ!!」

焦りを見せてミサトが言う。

「焦らないで。カスパーまで乗っ取られたわけじゃないのよ」

そういつてタイピングを続けるリツコ。だが侵攻は止まらずカスパーも大部分が侵攻されていた。

「リツコ!!」

「大丈夫よ。まだ一秒近く余裕があるわ」

「一秒って」

「あら、ゼロやマイナスでなくてよ。マヤ、いける?」

「はい!!」

「これで!」

リツコとマヤは同時にエンターキーを押した。すると使徒の侵攻がいったん止まり、そしてMAGI全てのシステムがNERV側に戻った。

「やった!」

第一発令所内には安堵と喜びの声上がる。

「ふう」

リツコがパソコンをかかえてカスパーから出てくる。

「お疲れ様。コーヒー飲む？」

ミサトがそういってコーヒーを差し出す。

「いただくわ」

そうしてリツコは一口コーヒーを飲む。

「今回は生きた心地がなかったわ」

「よくやったじゃない」

ミサトはリツコを褒め称える。

「ミサトがくれたコーヒーがこんなにおいしいなんて、明日は雨かしらね」

「あら、失礼ね」

そうしてMAGIが使徒に乗っ取られることなく殲滅に成功した。

第拾陸話 死に至る病、そして（前書き）

更新遅れてすみません・・・

第拾陸話 死に至る病、そして

「ああっ、もうさんざんだったわ!!」

第拾壺使徒イロウルと呼ばれるようになったが、使徒殲滅まで地底湖にずっとエントリープラグの中で放置されていたシンジたちだったのだが一番機嫌が悪かったのはアスカだった。

「そんなこと言うなよ。リツコさんだってミサトさんだっていっぱいいっぱいだっただって」

シンジが懸命にアスカをなだめる。

「エントリープラグの中だって言ったって裸だったのよ!!。許されるわけじゃないじゃない!」

「だからさあ・・・」

こんな調子だったのだがシンジは数時間の上、アスカの機嫌を直すことに成功した。

「はぁ・・・」

「お疲れ様にゃ、ワンコ君」

疲れてベンチに座っているシンジにマリが話しかけてくる。

「ホントだよ。アスカの機嫌直すの大変なんだから」

「まあ、ワンコ君だからアスカもああいう態度をとるんだと思うよ？」

「ああいう態度って？」

「アスカは自分に素直じゃないからね……。そのうちわかるにや」

「??.?」

「鈍感なのも苦勞するにや……。それじゃ」

そうしてマリはどこかへ行ってしまった。

「なんだったんだろ？」

そうしてシンジはずっとそのことを考えながら眠りについた。

翌日……

「第参新東京市直上に使徒出現!!」

「富士の観測所はどーなってるの!？」

ミサトがきて言う。

「観測、ありません。いきなり現れました」

「パターンオレンジ。A・Tフィールド、反応ありません」

「A・Tフィールドがないなんて……。新種の使徒!？」

リツコも驚きの声を上げる。

「依然動きはありません」

「どーしましょ」

そこにシンジたちが駆けつける。

「どういことですか？」

「みての通り、使徒だけどわからないだらけよ」

「とりあえず攻撃してみれば？」

アスカが言う。

「使徒がなにをするのかわからないからね・・・」

「迎撃システムで攻撃してみては？」

「それ、ナイス」

シンジが言ったことにレイが同意する。

「一理あるわね・・・。いいわ、やってみましょう」

そうして山の麓にある迎撃システムで使徒を攻撃する。

「・・・！？。パターン青！！。迎撃システムの真下です！」

「なんですって!？」

迎撃システムの真下から黒い円形のもが出現すると徐々に迎撃システムを取り込んでいく。

「なんなの、あれ・・・」

迎撃システムとその周辺を取り込むと黒い円形のは消え再びゼブラ模様の球体が姿を現した。

「・・・で、検証の結果はどうなのかしら？」

リツコが使徒の正体を探るべくMAGIを使って調べていた。

「ええ。驚いたわ」

と言ってリツコはミサトに説明を始めた。

「実はあの黒い影は使徒本体なのよ」

「はああ!？」

ミサトは驚きの声を上げる。

「あの黒い影はディラックの海・・・。おそらく別の宇宙につながってるんじゃないかしら？」

「じゃあ、あの影は？」

「虚数回路が開けば消えてしまう。あれこそが影なのよ」

「・・・どうしようかしらねえ」

シンジたちはエントリープラグ内にて待機をしていた。

「どうするのよ。あんなの、たおしようがないわよ!!」

アスカが叫ぶ。確かに今回の使徒に関しては倒す手だてが見つからない。

「そんなこといっても私たちは使徒殲滅が最優先。どうにかしないと・・・」

レイがアスカにたいして言う。

「ミサトさん」

シンジが通信を開いてミサトを呼ぶ。

「どうしたの？」

「僕が攻撃を仕掛けてみます」

シンジが言い出したことにみんなは驚く。

「なにを言ってるの!?!。あの使徒は対象物を飲み込むのよ!?!。攻撃した結果なんて目に見えてるじゃない!!」

「でも、このままじっとしてても解決しません」

「でも!!」

その時、警報が鳴り響く。

「なに!？」

「初号機の拘束具がはずされていきます。初号機、リフトにセットされました!!」

「誰がやってるの!?!。阻止して!!」

「ダメです。信号、拒絶!!」

「なんですって!?!」

そして初号機は地上に射出された。

「これでいいのかな、シンジ君?」

この工作したのは加持だった。事前にシンジから頼まれていたのだ。

「シンジ君、戻りなさい!。シンジ君!!」

ミサトの呼びかけにも応じず、通信をカットする。

「なに考えてんのよ!!」

ミサトは愚痴をこぼす。

「あれか・・・」

初号機は使徒にかんずかれないうように移動し、ハンドガンを構える。

「ここだー!!」

初号機は使徒に向けてハンドガンを放つ。その瞬間に影は消え、初号機の真下に本体が現れる。

「はっ！」

初号機は腰に装備してあった斧をビルに刺して足場を作るとビルの屋上に着地する。

「すごい・・・」

下を見下ろすと黒い影が広がっていた。

「ええい！」

初号機は黒い影に向かってハンドガンを放つが反応がない。

「やはりA.Tフィールドを持ってるのか。でも中和なんてどうやって・・・」

そこでシンジは前を向いた。するとビルの残骸が黒い影から放たれて初号機に激突した。

「ぐっ・・・！」

初号機はそのままビルから落下した。しかし普通はあるはずの衝撃がなく、代わりに沼にはまったような感覚におそわれた。

「・・・!?!、しまった!」

初号機は黒い影に取り込まれていた。ハンドガンを放つがやはり効果はない。

「ぐっ、この!!」

初号機はもがいて脱出しようとするがそれも出来ず、飲み込まれてしまった。

「シンジ君!」

モニターで初号機を確認していたミサトたちも焦る。

「初号機、反応なし」

その後、アンビリカルケールを巻き取ってみたがつながっているはずの初号機本体は無かった。

「あのバカシンジ。無茶するから!!」

「どうすれば碇君が助かるか、考えないと」

「マリ、なんか案ある!?!」

「今回ばかりはお手上げだにゃ」

その時シンジは・・・

「周りが広すぎてなにも分かんない。生命維持モードにしてもあと十時間が限界か・・・」

シンジはそう言うときいさく縮こまった。

「とりあえずじつとしてるしかないな・・・」

「全N2爆弾を黒い影に落とすですって!？」

ミサトとリツコは初号機救出のためになにか方法がないか模索していたところでリツコが持ち出した話はこんな内容だった。

「ええ。全N爆弾を落とせば数秒ながらディラックの海に干渉可能な時間ができる。そのうちに初号機を捕捉してサルベージすれば回収可能だわ」

「そんなこといったって、パイロットの影響は!？」

「ボディが寸断されていても構わない。この際パイロットの生死は問いません」

「あんた、なに言ってるか分かってんの!？」

「そうでもしなければ助からないわ。彼も」

そういつてリツコは部屋を出ていった。

一方、シンジは・・・

「・・・！？。LCLが濁ってきた。循環機能が悪くなってるんだ。血の味がする・・・」

生命維持モードも残り数時間でシンジは自分の死期を感じていた。

「僕はもう死んじゃうのかな。なにも出来ないで・・・」

そうしてシンジは目を閉じる。

「・・・もういいの？」

ふと、シンジに問いかける声が聞こえた。それは誰だか分からなかったがシンジは自然と口から声がでてしまった。

「母さん・・・？」

その呼びかけに答えて初号機の目が灯った。

「N2爆弾、投下六十秒前」

零号機と弐号機と伍号機も有事の際には対応できるように出撃していた。

そしてその時・・・

「グッ、グググッ・・・」

使徒に動きがみられた。すると空中に浮かぶ球体から手が出てきた。

「グオオ!!」

初号機が使徒を内側から引き裂いて出てきたのである。初号機はそのまま地上に真っ赤な血をまといながら着地した。

「私たちはなんでものに乗ってるの?」

アスカはこれを見て言う。ほかのパイロットも驚きを隠せなかった。

「まさか、人の息が届かぬところに・・・、エヴァに心があるの!」

リツコは初号機をみて言う。

「ただのアダムのコピーではないと今回わかった。でもそしたら、エヴァっていったい・・・」

ミサトもなにかを感じたかのようにいう。

人が真実にたどり着くのはまだまだ先なのだが・・・

第拾漆話　6人目の適格者（前書き）

お待たせしました！！
遅れてすみません・・・

第拾漆話 6人目の適格者

「シンジ、お見舞いにきてやったわよ」

第拾式使徒レリエル戦後、シンジは活動を停止した初号機から回収され、病院に入院することを余儀なくされた。とは言っても別に特別変わったことはなく、万一に備えて一週間と言うことだった。

「みんな、久しぶりだね」

シンジはアスカたちをみて言う。

「まったく、命令無視のあげくに入院だなんてミサトも大変よ」

アスカがシンジに言う。

「うん。だから謝っとこかなって思ってるんだ」

「そーしなさい」

そうしてシンジは退院した。

「すみませんでした。命令無視してこんなに迷惑かけて」

「ホントよ……。と怒ってやりたいところだけど無事だったんだし、許してあげるわ」

そうして学校に行った。いつも通りに変わりはなくいつも通りにシンジは帰って行った。

「確かに消滅したんだな!？」

「間違いありません。消滅です」

NERVはその時あわただしく動いていた。

「理由は分かったの？」

ミサトがリツコに尋ねた。

「ええ。これから報告するところ」

「しかし、第二支部が消滅とはね」

アメリカ第二支部と肆号機の消滅。実験中だった肆号機が何らかの形で暴走、第二支部をも巻き込んで消滅したのだった。

「事故の原因は設計ミスの段階から数万通り考えられます」

「タイムスケジュールからして修復したS2機関を搭載しての機動実験かと」

「よくもわからないものを無理して使うからよ」

ミサトが皮肉っぽくいう。

「しかし、爆発ではなく消滅とは・・・」

「おそらく、ディラックの海に飲み込まれたんじゃないかしら？」

リツコが衛星から届いた静止画像をみて言う。
そして会議は終了した。

「せっかく直したS2機関もパーね」

「そうね。夢は費えたわ。それとアメリカが参号機をこっちによこすみたいね」

「なにそれ!?!。参号機と肆号機は向こうが勝手に製造権を主張して作ってたんじゃない。いまさら危ないとこだけ押しつけるなんて虫が良すぎるわ」

「あの惨劇の後だったら誰だって弱気になるわよ。数千の人間が犠牲になったのよ。向こうも第一支部まで失いたくはないみたい」

「で、パイロットは?。ダミーとやらを使うのかしら?」

「それはまだわからないわ」

ミサトとリツコはその後別れた。

次の日・・・。

「シンジー!!」

「なにさ?」

ケンスケがシンジを呼んだ。

「新湯本まで出ない？。新作のアーマードコアがでんだ」

「僕は構わないよ。買いたいCDあったし。トウジは？」

「トウジは今日妹んどこだよ」

「そっか・・・」

「気にすんなって。見舞いにきてほしかったらあいつから言うし」

「そっか・・・」

シンジはその後ケンスケと行動をともにしたが心ここにあらずだった。

僕はトウジになにかしてやれることってないのかな・・・

場所を移してNERV。

「一週間後には参号機がここに搬入されます」

リツコが暗がりの部屋の中、ゲンドウに報告する。

「そうか。ダミーシステムは？」

「レイの人格を移植しました。ただ、その人格に従って考えているだけ。ただのフェイクですが」

「構わん。エヴァがそこにパイロットがいると思ひ込んでシンクロ

さえすればいいのだ」

「ただ、レイがこれに対する実験にあまり参加しなかったためにまだ問題点があります」

「問題ない。参号機のパイロットは？」

「ダミーはまだ無理なので六人目を選びます。一人、生態的に持ち上げられる子がいます」

「任せる。参号機の運搬は国連に一任してある。搬入後も任せるよ」

「分かりました。では・・・」

ダミーシステム。人格を機械にまねさせてまるでパイロットがいるかのようにエヴァに思わせシンクロさせるものである。

リツコはゲンドウと分かれた後、学校へ向かった。

「まったく、ワシもドジったの」

トウジは忘れ物をして学校に戻っていた。校庭にはいるとまるで待ちかまえていたように担任がたっていた。

「鈴原か。今すぐ校長室へ向かいなさい」

「えっ……。ワイ、なにか悪いことしたかいな」

そうして校長室に入ったトウジ。そこにはNERV技術部一課の人

物が座っていた。

「NERV技術部一課所属、赤木リツコ。以後、よろしく」

シンジは帰路についていた。いままで起こったことを頭で整理しようと思死だった。

「シンジ」

不意に名前を呼ばれて前を見るとトウジがいた。

「あれ？。トウジンちってこっちなじゃないんじゃ・・・」

「シンジ、いまからうちにこんか？」

「別にかまわないけど・・・めずらしいね」

「ちよいと聞きたいことがあるんや」

そうしてシンジはトウジとともにトウジの家に行った。

トウジの家はミサトと同じくマンションだった。ただ、ミサトとは比べられないくらいきれいだった。

それからシンジとトウジは他愛もない話をした。宿題がどうだとか学校がめんどくさいとか。それからトウジの作った夕飯を「ごちそう」になった。

「ごちそうさま」

「どや、結構いけたろ？」

そういつて空になった皿を下げる。

「聞きたいことってまさか今日の夕飯の感想？」

トウジは一瞬、暗い顔をしたがすぐに笑った。

「さあな。忘れてしもうた」

シンジは片付けを手伝うとトウジは玄関までおくらせてくれといった。

「すまん。こんな遅くまで引き留めてしもうて」

「ううん。大丈夫だよ。それじゃ」

そうして後ろ姿を見せたシンジに一瞬のためらいの後、トウジは肩をつかんだ。

「トウジ？」

シンジは振り向いてトウジをみる。その手はふるえていた。

「なあ、シンジ。一番始めにエヴァンゲリオンに乗ったとき、どないやった？」

「えっ？」

シンジは驚きを隠せなかった。

「なにいつて・・・」

「ワシ、今日NERVの人にパイロットになれって言われたんや。そうすれば妹をもっと設備のいい施設に送ってくれる言ったんや。そして受け入れてしもうた。最初は大丈夫て言い聞かせてたけど、見てみい。手え震えてるで」

「大丈夫だよ。エヴァの中って思ったより安全だし、スタッフの人たちのサポートもある。なにより、僕がやってるんだよ？」

だかトウジの震えは止まらなかった。

「すまんかった。おまえの気持ちも分からんで殴ったりしても。本当にすまんかった」

そして翌日・・・

「それじゃ2、3日留守にするけどよろしくね」

「はーい!!」

「はい・・・」

アスカは元気よく、シンジは暗く返事した。

ミサトが家を出た後シンジはアスカのためにご飯を作ると家を出た。

「どこ行くのよ!」

「ちょっとね」

そしてシンジがたどり着いた先には墓標がいくつも並んでいた。シンジの母、碇ユイのものもある。

「・・・!?!。父さん・・・」

シンジが母の墓標につく前にゲンドウが花を添えていた。

「シンジか」

ゲンドウはシンジをみる。

「驚いたな、父さんが来てるなんて。もしかして、毎年来てるの?」

「ああ・・・」

「・・・父さん。ここに母さんがいるなんてピンとこないんだ。だからあんまり来る気になれなくて」

「この墓標は飾りだ。遺体もない」

「写真とかないの?」

「ああ」

「本当に全部燃やしちゃったんだね」

「全ては心の中にある。今はそれでいい」

「・・・?」

「シンジ。もう私の背中を追うのは止めろ。お前はもう自分の足で立って前に進めるはずだ。もうお前は赤ん坊ではない」

「父さん？」

「私もそう生きてきた」

上空からはヘリが見えた。どんどん近づいてくると地面すれすれの所でホバリングをした。

「時間だ。先に帰る」

ゲンドウはそう言ってヘリに乗り込むとすぐに遙か彼方へ飛んでいった。

シンジはもっと聞きたいことがあった。地下の巨人のことやトウジがなぜパイロットになったのか。

だがそれを忘れてしまうほどゲンドウの一言はシンジに衝撃を与えた。

シンジはヘリを見送ると歩き出した。父が初めて父らしいことをいったような気がした。だが、ゲンドウの思惑までは理解できなかった。

第拾捌話 黄昏を黒に染めて（前書き）

最近部活が忙しくてなかなかうまくかけません。けどよろしくお願
いします。

第拾捌話 黄昏を黒に染めて

「フィフス・チルドレン。僕にもやっと役が回ってくるということか」

月面、タブバース。甲、乙号機が完成して最終調整の段階に入っていた。ちなみにNERVはこのエヴァの存在を知らない。

「シクス・チルドレンにはシンジ君の友達か……。神は案外えげつないことをするね」

少年はまるですべてを知ったかのように言う。その目は哀愁が漂っていた。

「シンジ君はいったいどうするのかな？」

その言葉からはただ哀れみが感じ取れた。そうして少年は前を向くとモノリスが現れる。

「タブリスよ……。準備は出来ているかな？」

「その名はあまり気に入ってません。出来ればもう一つの名で呼んでいただけないかな？」

「よかろう。渚カヲル」

渚カヲル。タブリス。色々な名を持っているが彼は人間ぽい名前が気に入っていた。

「第拾肆使徒が殲滅したらお前はNERVに配属される」

「死海文書外伝もついに終局へ向かうのか・・・」

「うむ。心して望めよ」

そうしてモノリスは消えた。

「分かってますよ」

一方、地球では・・・

「松代で事故!?!」

松代では今日、シクス・チルドレンの参号機機動実験が行われていた。

「みんなは!?!」

「分からないわ。とりあえず、至急NERVまで来て!」

「分かりました!」

シンジは指示を受け取るとNERVへ向かった。

「目標、松代から第参新東京市に向かっていきます」

「目標をモニターにうつせるか?」

「映像、出します」

すると夕日をバックにゆっくりと歩みを進める参号機が移された。

「やはりか・・・」

「生存者、全員確認できました」

ゲンドウはそれを聞くと手を組み直し言った。

「参号機は現時刻をもって破棄。目標を第拾参使徒と識別する」

「了解」

シンジたちが到着するとエヴァが起動する。

「エヴァ全機、発進！」

ゲンドウの命令でエヴァが地上に出された。

「式号機、あと30分で接触します！」

「まさか、使徒に乗っ取られるなんて・・・」

式号機はライフルを構えていると参号機は姿を現した。

「来た！！」

式号機がライフルの引き金を絞ると参号機は突然宙を舞った。

「!?!」

式号機はすぐさまライフルの銃口を参号機に向けて放った。しかし、参号機の腕によって阻まれた。

「腕が増えてる!?!」

式号機はすぐさま参号機との距離をとってみる。参号機の背中からは六本の腕がでていた。

参号機は式号機に向かって腕を伸ばすと身動きがとれないようにして引き寄せた。

「なっ・・・!?!」

参号機はそのまま腹部にけりをいれ、空中に投げた。そのまま式号機を地面に叩きつけて落下の勢いを利用して殴りつけた。

「ぐっ・・・!、こ・・・」

アスカの意識はここで途絶えた。

「回収班、パイロットの回収急いで!」

「零号機、目標と接触します!」

「レイ、目標の足止めをしろ。すぐに初号機を向かわせる」

ゲンドウがレイに指示を出す。

「了解」

零号機はライフルを構えて山に隠れる。参号機は零号機に気づかずに背中を向ける。

零号機はライフルの標準を参号機にむける。そこでエントリープラグが確認できた。

「やはり、人が乗ってる・・・」

一瞬、レイが引き金を引くのを躊躇う。すると参号機が前屈みになって零号機と目があった。

「!!」

参号機はその瞬間後ろに飛び零号機を背中から押さえた。

「ぐっ・・・」

参号機の腕からはねばねばした物質が零号機の腕につく。

「あっ、あああっ!!」

「零号機、使徒に浸食されます!」

「左腕切断!!」

「しかし、シンクロをカットしないと・・・」

「構わん、やれ!」

「はい・・・」

零号機の左腕が切断される。レイの体にもそれ同等の痛みが生じる。

「零号機、破損！。パイロットは重傷。回収急げ！」

残されたのは初号機のみとなった。

「シンジ、おまえがやれ」

ゲンドウはシンジに言う。

「やれって言ったって友達が乗ってるんだよ!？」

参号機は初号機の姿を認めると跳び蹴りを加えた。そして初号機の首を絞める。

「ぐっ・・・」

「おまえが死ぬぞ」

「友達を殺すよりはいい！」

「仕方がない。初号機とのシンクロを全面カット。ダミーを起動しろ」

「しかし、ダミープラグはまだ問題がありますし、赤木博士の許可もなく・・・」

「今のパイロットよりは役に立つ。やれ!!」

そしてシンジと初号機のシンクロがカットされた。

エントリープラグ内の内部に「dummy REI AYANAMI」と表示される。

シンジは苦しみから解放されるとゲンドウに叫んだ。

「何をしたんだ、父さん!!」

その瞬間、初号機の眼が赤く光った。

初号機は参号機の首をつかむと締め始めた。そして首をおる。参号機は初号機の首を絞めていた両腕を力無く垂らす。初号機はそのまま地面に叩きつけて顔面を殴って破壊した。

「トウジ、返事しろ!。殺されちゃうよ!。トウジ!!」

だがその応答に帰ってくる言葉はない。初号機は次々と参号機を破壊していった。四肢を引きちぎり、装甲板をはがしていく。ついに参号機かどうかわからない状態で初号機は参号機のエントリープラグをつかんでいた。

「やめろ!」

だが初号機の手にはどんどん力がこもる。

「やめろお!!」

その声に反応してか初号機は活動を停止した。

「初号機、活動停止。目標は沈黙しました」

その後、トウジはすぐに病院に搬入された。幸い使徒浸食の影響はなかった。だが、シンジはもう少しで自分の手でトウジを殺させる

ところだったゲンドウを許せなかった。

そうしてシンジは初号機に立てこもった。

それだけ父を許せなかったのである。

空はきれいな夕焼けを飲み込むように暗くなっていた。

第拾玖話 男の戦い（前書き）

質問があつたのですがシンジはこれからマナと付き合うことになります。なのでどうか気長に。まだまだつづきますよ

第拾玖話 男の戦い

「シンジ君!!」

シンジは初号機のなかで立てこもっていた。

「何も聞きたくない!。みんなは僕にトウジを殺させようとしたんだ!」

「だが、そうしなければ君が死んでいたかもしれないんだぞ!!」

「うるさい!!。そこで座ってるだけの人たちがなにがわかるってんだ!」

「シンジ君!!」

「あと三分内部電力がある。これだけあれば本部を破壊することだって可能だよ」

「今のシンジ君だったらやりかねませんね」

するとゲンドウが静かに告げた。

「LCL圧縮濃度を最大にしろ。子供のただにつきあってる時間はない」

「はい」

「なにをしたって・・・ぐっ!」

LCLが圧縮され、急に意識が遠のく。

「・・・ちくしょう・・・」

その後、シンジは気を失った。

「・・・はっ」

シンジが気がついたのは病室だった。横に雑誌を読んでいる加持がいる。

「か、加持さん・・・」

「おっ、気がついたかい。それじゃ、いこうか」

「いこうかって、どこへです？」

「君は気が進まないだろうが司令が君の目が覚め次第引きずってでもつれてこいと仰せだからね」

そしてシンジは加持に連れられてゲンドウのもとに連れて行かれた。ゲンドウはいすに座ってじっとしていた。

「思ったより元気そうだな」

ゲンドウはシンジに言う。

「エヴァの私物化、及び本部破壊未遂は立派な犯罪だ。なにか言うことはあるか？」

「はい。僕はもうここにはいたくありません。エヴァにも乗りたくありません」

「そうか。分かった。お前には失望した」

「じゃあ、サヨナラ」

そうしてシンジは部屋を出た。その後、ゲンドウは電話を手にとった。

「サードチルドレンは抹消。初号機はレイをベシックにダミーをバックアップにまわせ」

シンジは本部の入り口でマリと出くわした。

「荷物まとめて引っ越しかにゃ？」

シンジはマリの顔をみると俯く。

「今まで世話になったね」

そうしてシンジはマリの横を通り過ぎようとする。

「意地ばかり張ってても仕方ないよ」

「僕はもう、誰とも笑えない」

そう言ってマリの横を通り過ぎて歩いていった。

その後ミサトに駅まで送ってもらった。

「シンジ君、今回のことはどんなに謝ってもすまないと思う。でもこれだけはわかってちょうだい。わたしはあなたに自分の願い・夢・目的を重ねていたわ。それが重荷になってたとしてもあなたに未来を託すしかなかったのよ」

「ミサトさんの夢ってなんですか？。人類の平和ですか？。人の命を踏みつけにして。人の命の重さは同じなのに」

「・・・ごめんなさい。勝手な言い分だったわね。・・・本部までのパスコードと部屋はそのままにしておくから・・・」

「無駄です。僕はもう、エヴァには乗りません」

シンジはくるりとまわって改札を抜ける。途中、ミサトをもう一度みてこういった。

「さよなら、ミサトさん。お世話になりました」

ミサトは見送った後、車でNERVに向かっていた。

「人類の平和か・・・。偽善ね。今までただがむしやらにやってきたけど本当はお父さん・・・。あなたの仇を討ちたいのかもしれないわね」

シンジはプラットフォームに立ち尽くしていた。

「ごめんよ、トウジ。今は涙もでない」

そこで警報が鳴った。

「使徒が来たのか？」

シンジは駅から出てみると使徒を視認した。

「僕はもう、乗らないって決めたんだ」

一方NERVでは・・・

「使徒は？」

「現在本部直上です！！。・・・うわっ！」

衝撃が不意に彼らを襲う。

「第一から八番装甲まで融解！！」

「十八もある特殊装甲を一瞬で・・・！！。エヴァの地上迎撃は間に合わないわ。ジオフロントに配置して！！」

「式、伍号機はすぐに直援に回して！。零号機はロングライフル装備でA・Tフィールド中和地点に待機！！」

「了解！！」

零、式、伍号機はすぐにジオフロント内に射出される。

「アスカ、使徒が侵入と同時に射撃開始。手加減はいらないわ。最初から飛ばしなさい！！。マリは式号機の援護！」

「了解!!」

「あと一発で全ての装甲板が融解します」

「初号機はダミーで起動しろ」

「司令!!」

「早く」

「・・・はい」

そしてついに使徒が侵入してきた。

「来たわね!!。シンジなんかいなかったってわたしひとりでお茶の子さいさいよ!」

そして弐号機は両手に抱えたライフルの引き金を引いた。

「いっけええ!!」

しかし使徒はまったく効いてないようでゆっくりと降りてくる。弐号機は玉切れになったところで武器を変え、今度はバズーカを放つ。

「A・Tフィールドは中和しているはずなのに・・・」

確かに、遠いとはいえ零号機はA・Tフィールド中和地点にいるし弐、伍号機は使徒の目の前で中和をしている。なのに全く効いていない。

「なんできないのよお!!」

また玉切れを起こしたところで今度は使徒が動きを見せた。
両手に当たる部分を折り畳んでいたのをのぼすと式号機の両肩めが
けて超スピードで飛んできた。

「危ない!!」

伍号機は式号機を押し倒して的確をはずさせる。

「接近戦で行くわよ!!」

式号機は素早く起きあがるとソニックブレイヴを手にとって使徒に
接近する。

「了解にゃ!」

伍号機もランスを構えて接近する。

「・・・援護する」

零号機がロングライフルで使徒に牽制する。

「てええい!!」

式号機がA・Tフィールド全開で中和しつつソニックブレイヴを突
き立てる。しかし、それは阻まれた。伍号機も同じだった。

「なっ!？」

近づいてみて初めてわかった。使徒は何重にもA・Tフィールドを張っていた。しかも強靱な。

使徒は両手を左右に広げて回転して式号機と伍号機を吹き飛ばした。

「くっ・・・」

「キャア!!」

式号機と伍号機は起き上がって使徒を確認する。

「最強の拒絶タイプとはまさにこいつのことだにゃ」

「あんなの、どうしろって言うのよ!」

「仕方ないにゃ。人を捨てたエヴァの力、見せてあげる!!。裏コード「ザ・ビースト」!!!!」

すると伍号機のバイサー型の眼が赤く光った。そのまま伍号機の足が二本足になって両手が前足のようになりまるで獣のように伍号機が変化した。口からは牙が多く見える。

「なんなの、あれ!?!」

「心配ないにゃ!!」

マリがアスカに言う。

「いくぞー!!」

伍号機は吠えたと使徒にものすごいスピードで接近、体当たりをした。使徒はA・Tフィールドでそれを防ぐ。そして伍号機に腕を巻き付けて投げた。

「うっ!!」

衝撃がマリを襲う。ついでビームを放とうとした。

「!!」

しかしそのビームは伍号機に当たることはなかった。零号機が前にでで、A・Tフィールドで防いだのだ。

「ありかと」

「大丈夫そうね」

そうして体勢を立て直すとまた使徒に向かった。

「うおおっ!!」

その光景をジオフロント内の畑でみている人物がいた。

「僕はもう、乗らないって決めたんだ」

碇シンジである。シンジは言いながらも戦闘の様子を見つめていた。

「おや、シンジ君じゃないか」

「加持さん？」

加持はこんな戦闘のなか、スイカに水を与えていた。

「なにしてるんですか！？。危ないですよ！！」

「なについてみての通りさ。君は？」

「僕は・・・」

「そうやって意地ばかり張っていてもだめだぞ。それに君はまだ友達のことを理解していない」

「どういうことですか？」

「鈴原君はね、君の力になれなかったことを後悔していた。君を恨んでなんか、ひとつも思っちゃいなかったんだよ」

「トウジ・・・」

「そしてこうも言っていた。君のためにレイちゃんやアスカが戦っているのに、君がなにもしていなかったら彼がぶっ飛ばしてやるかな」

「僕は・・・」

「シンジ君。俺はここで水をやることしかできない。だが君はやれることがあるはずだ。自分で考え、自分で決めろ。自分が今なにをすべきなのか。まっ、後悔のないようにな」

「加持さん……。ありがとうございます」

そしてシンジは本部へむけて走っていった。

「ダミープラグ、作動しません！」

「……。なにが望みなんだ、ユイ」

初号機はダミーを拒絶し起動していなかった。

「貳号機、両肩切断されました！」

「シンクロ全面カット!!!。急いで！」

その後零号機も使徒の一撃を受けシンクロをカットされる。伍号機は依然ビースト化して戦っていた。

「こんのおお!!!」

伍号機は使徒のA.Tフィールドを食いちぎると打撃を加える。だが使徒はそれを受けながらも至近距離でビームを放ち、右肩をちぎる。ビームは貫通してそのまま本部に直撃した。

「まずい!。メインシャフトが丸見えだわ!!!」

「おりゃあ!!!」

伍号機は使徒を押し倒すが使徒は腕で伍号機の胴を貫いた。

「……。!?!」

伍号機もシンクロをカットされ、邪魔者はいなくなったと使徒はゆうゆうと本部に侵入する。

「まずい、ここにくるわよ。全員退避!!」

だが間に合わず使徒が眼下に現れる。

「くっ・・・」

ミサトは反射的に十字架のペンダントを握る。まるでなにかを祈るように。

そしてその祈りはとうじた。初号機が突如出現して使徒を射出口まで押し込む。

「シンジ君!？」

不意に使徒が放ったビームが左腕を焼きちぎるがお構いなしに押さえつける。

「ミサトさん!!」

「五番射出!!」

使徒と初号機はその後ジオフロントに射出され初号機は使徒を地面にたたきつける。

「うわあああ!!」

シンジは絶叫し初号機を使ってひたすら使徒の顔を殴る。

しかし突如初号機は動きを止めた。

「えっ？」

「初号機、活動限界です！！」

「そんな、頼みはもう初号機しかないのに」

使徒は動きを止めた初号機の顔に手を巻き付けると山の側面に投げつけた。そして初号機の胸部にビームを放ち、コアを露出させた。

「あれは・・・」

ミサトは露出されたコアをみてつぶやく。

そして使徒はコアを攻撃し始めた。

エントリープラグ内ではシンジが無作為に操縦桿を退いたり押したりしていた。すでに使徒の攻撃でヒビが入っている。

「動け、動け、動け！。今やらなきゃ、今動かなきゃみんな死んじやうんだ！。もうそんなの嫌なんだよ！！。だから、動いてよ！！」

・・・ドクン・・・

不意になにか音が聞こえて顔を上げる。そして・・・
初号機がコアに向かっていている途中の手に向けて手をかざし、切り裂きながらそれを握ると一気に引き寄せてそれから手を引きちぎると同時に蹴りを加えて吹っ飛ばした。

「初号機、再起動・・・」

初号機は使徒の腕を持ったままゆっくりと立ち上がった。そして傷口にそれをあてがうと使徒の腕が初号機の腕へと変換された。

「ウオオオ!!」

初号機が吠えると同時に使徒が腕をのばしてきたが初号機は手を上にかざし下に振り下ろす。その軌跡通りにA・Tフィールドが刃となって腕を切り裂き使徒のA・Tフィールドをも切り裂いて使徒にダメージを与えた。ダメージが大きすぎて倒れ込む使徒。それにむかって初号機は四足歩行をして使徒に接近した。最後のあがきとしてビームを放とうとするが顔を手でえぐられ阻止される。まさに虫の息状態の使徒を初号機は食べ始めた。

「使徒を食ってる?」

使徒を食べ終わるとまた吠えて次々と装甲板が破壊される。

「拘束具が!」

「拘束具?」

「そう。あれはただの装甲板ではないの。人間の手で万が一でも阻止できるように作られた拘束具なの」

「そんな・・・」

「初号機の暴走と覚醒。ゼーレが黙っちゃいけませんな。これもシナリオですか、碇司令」

加持が誰もいない部屋でつぶやく。

「これからだな」

「ああ」

ゲンドウは司令室で不敵に笑った。

それは冬月でさえ感じ取れなかった策略ある笑いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8936h/>

新世紀エヴァンゲリオン ANOTHER story

2010年10月10日19時55分発行